

府道高石北線建設事業に伴う

伽羅橋遺跡発掘調査報告書

—大阪府高石市高師浜一丁目所在—

2001年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



焼失建物跡11 検出状況



焼失建物跡11 掘削状況



千体仏



文字瓦 (□陀佛)



土坑47 検出状況



土坑47 出土遺物

序 文

伽羅橋遺跡は大阪府高石市に所在する、古代から中世にかけての遺跡です。

これまで数次にわたる調査が行われており、七堂伽藍を配する泉州大雄寺の前身寺院跡と推定されている遺跡です。

今回の発掘調査では、砂堆上に形成された中世期の建物跡や当時の道など多数の遺構が検出され、高石市の歴史はもとより近年飛躍的に増加した泉州地方の古代から中世の考古学的資料を新たに提供する多大な成果を得ることができました。

とりわけ、火焰宝珠文軒丸瓦や千体仏をはじめとした豊富な出土遺物は、今後考古学のみならず関連する分野での当該期に関する研究に際し、貴重な資料になり得るものと思われまます。

本調査を実施するに当たりまして、地元の皆様方をはじめとし鳳土木事務所並びに大阪府の関係諸機関、高石市教育委員会のご協力によって進められました事に深く感謝の意を表します。

今後とも文化財に対しより一層のご理解を賜り、当センターの事業に変わらぬご支援を賜りますようお願いいたします。

平成13年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 水野正好

例 言

- 1 本書は府道高石北線建設に先立つ、伽羅橋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査区は大阪府高石市高師浜一丁目4に所在する。
- 3 本調査は鳳土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、現地調査を(財)大阪府文化財調査研究センターが実施した。
- 4 本調査は当センター調査部長井藤徹、参事兼調整課長中西靖人、南部調査事務所長瀬川健、調査第一係長松岡良憲のもと、現地調査を一係技師服部美都里が担当した。遺物洗浄は主査村上富喜子の協力を得た他、写真撮影は主任技師立花正治が主として当たり久禮孝志、加茂幸彦が補佐した。
- 5 現地調査は平成11年10月15日～平成12年3月3日まで実施し、引き続き南部調査事務所において整理作業を実施した。
- 6 本書で作成した資料及び出土遺物は当センターで保管している。
- 7 調査に当たり、高石市教育委員会主幹神谷正弘氏、吉田とも子氏、岸和田市教育委員会近藤利由氏、同志社大学鋤柄俊夫氏、兵庫県教育委員会岡田章一氏のご指導を賜った。また、宇田川誠一氏を始めとする高石郷土史会の皆様、大阪府教育委員会玉井功氏・福田英人氏・田中和弘氏・森屋直樹氏にご指導並びにご教示を頂いた。当センター技師合田幸美・駒井正明・中村淳磯・岡本圭司・本田奈都子、専門調査員清水哲の諸氏より多くの助言を得た。
発掘調査及び整理作業には以下の協力が得られた。記して感謝を表したい。(順不同)
大井裕美子・福山綾・中山由佳里・松村より子・内山信子・黒川敦美・松井晴美・青山裕美子・村岡浩康の諸氏、また基礎整理作業は松井理恵・立石京子・原田麻衣・二宮さき子・小原睦子・三島けい子・若井キヨ子の諸氏。(株)五大コーポレーション 奥田忠義氏・吉田克行氏・東内康成氏、(株)島田組 河瀬一裕氏、(株)南紀航空 坂江定文氏・増田一臣氏
- 8 本書の編集は服部が行った。

凡 例

- 1 本書の標高は全てT P (東京湾標準潮位)を用いている。
- 2 本書出用している座標値は全てkm単位である。
- 3 方位は国土座標第Ⅵ系の座標北を示す。

伽羅橋遺跡発掘調査報告書 目次

本文目次

序文

例言・凡例

第1章 調査に至る経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 伽羅橋遺跡周辺の地形と環境	2
第2節 伽羅橋遺跡の既往調査	4
第3章 調査結果	6
第1節 調査方法	6
第2節 基本層序	7
第3節 調査結果	8
1 古代以前の遺構と遺物	15
2 中世の遺構と遺物	15
3 近世の遺構と遺物	28
第4章 まとめ	30

< 挿図目次 >

第1図 伽羅橋遺跡 位置図 (25000 : 1)	
第2図 伽羅橋遺跡 周辺地形図 (高石市史より転載)	
第3図 伽羅橋遺跡 発掘調査既往一覧図	
第4図 調査地区割図	
第5図 基本層序図	
第6図 全体遺構図	
第7図 第6面 土坑47	平 断面図
第8図 第6面 井戸60	平 断面図
第9図 第4面 井戸39	平 断面図
第10図 第4面 土坑33, 36, 37, 38	平 断面図
第11図 第3面 焼失建物跡11	平 断面図
第12図 第3面 道路状遺構12	平 断面図
第13図 第3面 溝13	平 断面図
第14図 第3面 土坑7	平 断面図
第15図 第3面 井戸4	平 断面図
第16図 第3面 井戸5	平 断面図
第17図 第1面 井戸1	平 断面図

< 表目次 >

- 表1 高石市遺跡一覧表
表2 遺構一覧表
表3 遺物一覧表

< 卷末図 >

- 卷末図1 出土遺物（石器，石製品，土器）
卷末図2 出土遺物（土器）
卷末図3 出土遺物（瓦）

< 写真目次 >

- 写真1 第7面 自然流路80（南南東から）
写真2 同 出土遺物 石包丁（1）
写真3 第6面 自然流路56 出土遺物 石製模造品（2）
写真4 第6面 土坑47 近景（南東から）
写真5 同 出土遺物 瓦器椀（3）
写真6 同 出土遺物 瓦器椀（4）
写真7 同 出土遺物 瓦質小皿（5）
写真8 同 出土遺物 石塼（6）
写真9 第6面 井戸60 検出状況（北東から）
写真10 同 出土遺物 瓦質羽釜（7）
写真11 第6面 土坑群 遠景（北西から）
写真12 第6面 土坑76 出土遺物 瓦質小皿（8）
写真13 同 出土遺物 瓦器椀（9）
写真14 同 出土遺物 瓦器椀（10）
写真15 第5面 砂堆46 検出状況（南南東から）
写真16 第4面 井戸39 完掘状況（北西から）
写真17 同 断面（南東から）
写真18 同 出土遺物 瓦器椀（11）
写真19 第4面 自然流路27 遠景（南東から）
写真20 第4面 溝42，土坑群 遠景（北西から）
写真21 第4面 礎石43 検出状況（北北東から）
写真22 第4面 土坑32～34 近景（北東から）
写真23 第3面 焼失建物跡11 検出状況（北西から）
写真24 第3面 焼失建物跡11，道路状遺構12，溝13 検出状況（南南東から）
写真25 同 掘削状況（南南東から）
写真26 第3面 焼失建物跡11 出土遺物 雁振（12）
写真27 同 鬼瓦（13）
写真28 第3面 焼失建物跡11 出土遺物（14～17壁 竹材）
写真29 同（18壁 刎入）
写真30 第3面 包含層 出土遺物 蛸壺（19）
写真31 第3面 溝13 出土遺物 蛸壺（20）
写真32 同 遺物出土状況（東から）
写真33 同 遺物出土状況（北から）
写真34 第3面 土坑7 近景（東から）
写真35 同 出土遺物 硯（21）
写真36 第3面 井戸3 検出状況（南南西から）
写真37 第3面 井戸4 検出状況（東から）
写真38 第1面 井戸1 検出状況（南南西から）
写真39 同 掘削状況（南南西から）
写真40 同 出土遺物 瓦（22）
写真41 同 出土遺物 瓦（23）
写真42 同 出土遺物 瓦（24）

< 図版目次 >

- 図版1 出土遺物
図版2 出土遺物
図版3 出土遺物
図版4 出土遺物
図版5 出土遺物
図版6 出土遺物
図版7 出土遺物
図版8 出土遺物
図版9 出土遺物
図版10 出土遺物
図版11 出土遺物

第1章 調査に至る経過

大阪南部に位置する高石市は、昭和41（1966）年に市制を施行し、臨海部分を埋め立て急激に変貌を遂げた地域である。市域には南海本線とJR阪和線が、また国道26号線と大阪和泉南線（13号線）も同様に大阪湾に平行して大阪と和歌山を結んでいる。人口増加に加え、関西空港建設を契機とした泉州地域の急速な開発に伴い、近年湾岸線や阪神高速が開通したにも関わらず、市内の交通量は増大する一方となっている。このような状況を緩和するため、昭和50年に、高石市域を東西に縦断する国道26号線と堺阪南線を結ぶ都市計画道路府道高石北線が計画され、既に昭和63年には一部共用を開始し都市整備が進められつつある。

建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについては、大阪府土木部と大阪府教育委員会との間で協議がもたれた。建設予定地の南端部は伽羅橋遺跡にかかり、古くより遺物散布地として知られていた。

伽羅橋遺跡は昭和30年には同志社大学の発掘調査によって、当時としては遺跡として扱われることが少なかった中世の遺跡の先駆けとして知られるに至った遺跡である。こうした経緯を踏まえ、工事に先立ち平成10年9月1日～同5日に大阪府教育委員会文化財保護課により試掘調査を実施した。7箇所のトレンチにより遺物包含層が確認され、この結果を受け再度関係機関との協議がもたれ、当該地の道路建設予定地部分についての全面発掘調査が実施される事となった。

本事業については地域整備の早急な対応が望まれており、大阪府土木部の委託をうけ、大阪府教育委員会の指導のもと財団法人大阪府文化財調査研究センターが調査を担当する事となった。現地調査は平成11（1999）年10月15日に着手し、平成12（2000）年3月3日をもって全ての作業を完了した。整理作業は南部調査事務所で実施された。



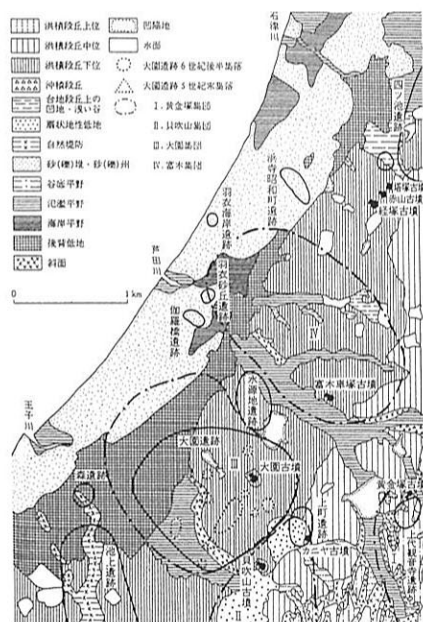
第1図 伽羅橋遺跡 位置図 (25000 : 1)

第2章 位置と環境

第1節 伽羅橋遺跡周辺の地形と環境

伽羅橋遺跡は高石市高師浜一丁目に位置する。現在は、堺阪南線沿いに位置するが、海浜部の埋め立て事業以前の海岸線からは300m程東にあたり、明治以前は砂浜が広がる一帯であったという。南海高師浜線の伽羅橋駅周辺一帯では、古くから遺物の散布が知られる地域である。

現在海岸線は臨海工業地帯となり、「和泉名所図絵」に記載されていた白砂青松といった風光明媚な高師浜の面影は既になく、南海本線以西は住宅地となっている。現在の伽羅橋遺跡の標高はTP + 3m前後で、和泉丘陵から派生する低～中位段丘上に見えるが、南海本線開通以前の周辺地形は、大阪湾から続くなだらかな海岸線の続く砂丘で、狭小な芦田川と王子川と相まって水害の多い砂堆上に位置して



第2図 伽羅橋遺跡 周辺地形図
(高石市史より転載)

いることが解る(第2図)。西風により大阪湾から砂が打ち寄せられ堆積する砂で、僅かながら微高地状になった浜堤部分に紀州街道が走行しており、そうした微高地に集落形成や開発の歴史を左右する地形的境界となっていることが考えられる。

高石市には現在紀州街道と熊野街道を含め、15箇所の遺跡が確認されている(第1図)。各遺跡については、高石市史および高石市教育委員会調査報告書に詳細が記述されているため、一覧表として記載した(表1)。

高石市の立地により、市域の遺跡は大きく2つのグループに大別される。

一つは伽羅橋遺跡と共に完新世の砂州・砂堆上に確認された羽衣海岸遺跡・羽衣砂丘遺跡・伽羅橋東遺跡のAグループ、もう一つは後期更新世低位～中位段丘上に営まれた水源地遺跡・大園遺

遺跡番号	文化財名称	種類	時代	文化財所在地	立地	遺構	遺物
1	羽衣海岸遺跡	散布地	古墳中期	高石市羽衣海岸一帯	海岸		須恵器 土師器 蛸壺形土器
2	羽衣砂丘遺跡	散布 住居跡	弥生後～奈良前	高石市羽衣浜神社付近	砂丘		弥生式土器 土師器 須恵器 瓦質土器 他
3	伽羅橋遺跡	寺院跡	平安後期	高石市北601の4の586	砂丘	井戸	瓦質土器 石塼 青白磁 フィゴ 鉄滓 土馬 具類
4	伽羅橋東遺跡	散布地 寺院跡	弥生後 古墳 平安後期	高石市北567	平地		弥生式土器 土師器 瓦質土器 青磁 平瓦 軒丸瓦 他
5	水源地遺跡	散布地	古墳後期	高石市綾井住宅付近	台地		須恵器 土師器 瓦質土器
6	大園遺跡	住居跡 寺院跡	旧石器～江戸時代	高石市大園一帯	台地		旧石器 弥生式土器 土師器 須恵器
8	富木車塚古墳	前方後円墳	古墳後期	高石市918-2・3		横穴式石室 粘土槨	直刀 鉄鏃 馬具 耳環 玉(碧玉 ガラス コハク 銀 水晶 硬玉 滑石) 轡口 太刀 刀子 鉄剣 鉄製利器 陶棺 須恵器 土師器 他
9	無名塚古墳	前方後円墳	古墳	高石市富木81			
10	取石遺跡		古墳中期	高石市取石3丁目	平地		須恵器 土師器
11	富木南遺跡	散布地	古墳後 鎌倉	高石市富木富木南住宅	台地		須恵器 土師器 青磁
16	大園古墳	前方後円墳	古墳中期末	高石市西取石8丁目4			
17	日明山遺跡	墓	弥生	高石市			
18	上町遺跡	集落跡	古墳	高石市取石			

表1 高石市遺跡一覧表

跡・大園古墳・富木車塚古墳・無名塚古墳・取石遺跡・富木南遺跡のBグループである。

Aグループは、砂堆上に形成されるため遺構そのものが風化作用を受け、遺構検出と時期の確定が困難な遺跡群である。包含される遺物は多岐に渡っており、縄文～江戸時代まで連綿と生活が営まれていた事は判明しているが、遺物の伴う遺構が少ないため実態は不明である。Bグループは主に弥生時代以降に浜堤によって形成された後背湿地が埋積し、大園遺跡と富木車塚古墳を代表として、周辺は畿内文化とほぼ同様に展開する遺跡群である。

市内には旧石器時代からの歩みは連綿と確認されるものの、有舌尖頭器などの遺物が認められるのみで実態は不明である。続く縄文時代も、近年縄文晩期の深鉢など資料の増加は見られるが遺構に伴った資料ではないため、依然不明な点は残る。弥生時代になると、弥生中期以降の土器や石器が包含層や溝、土坑といった遺構からの出土が確認され、周辺に集落が想定される。古墳時代は掘立柱建物や古墳などが確認されている。飛鳥時代以降は遺構には伴わないものの、埴輪や瓦の出土遺物から白鳳時代の寺院が想定される。平安時代後期以降は資料の増加が認められ中世期の瓦や土器は、市内随所から検出され集落や寺院が想定される。以下、市内の遺跡について概要を記す。

羽衣海岸遺跡と羽衣砂丘遺跡は古代から中世の遺物散布が認められる遺跡である。

水源地遺跡と富木車塚古墳はその位置関係から、古墳時代の集落と首長墓の関連が考えられる。水源地遺跡からは5世紀後半の掘立柱建物群が検出され、2×2間の倉庫や建物跡などの様相は大園遺跡と類似する点が多く、古墳時代の集落として広がり期待される。韓国洛東江の須恵質双耳壺などは注目に値する。

大園遺跡（綾園今池遺跡他、を包括する）と大園古墳は、旧石器時代から江戸時代までの複合遺跡で、古墳時代の掘立柱建物をはじめとして付近には同時期の古墳の存在から、古代より開発の進んだ地域である。中世期にもかなり広範囲で集落が形成されており、高石市の中心的遺跡である。

等乃伎神社は式内社であり、付近では古代からの開発が窺われる。富木南遺跡、取石遺跡、日明山遺跡、上町遺跡などは古墳時代以降には確実に生活の営みが確認できる。

伽羅橋遺跡から、遺構には伴わないものの、埴輪（奈良県桜井市山田寺と同汎）や単弁八葉軒丸瓦（奈良市本薬師寺と同汎）の出土遺物が認められることから白鳳時代以降の寺院が想定される。平安時代以降、中世期の瓦や土器は伽羅橋遺跡と伽羅橋東遺跡をはじめとして、市内随所の遺跡から検出され、寺院や集落が想定される。高石市内には、奈良時代の清浄土院、中世寺院として専称寺、大雄寺、長安寺など多くの字名と伝承が数多く残されているが何れも考古学的に立証されていない。昭和63年の調査によって13～16世紀まで存続していた専称寺（綾井城）の存在が明らかとなった。現在の専称寺の敷地で、土塁に囲まれた城館が検出されている。

近世期は、紀州街道や熊野街道が整備され、高石村と高石北村の位置がやや固定され現在にいたる。

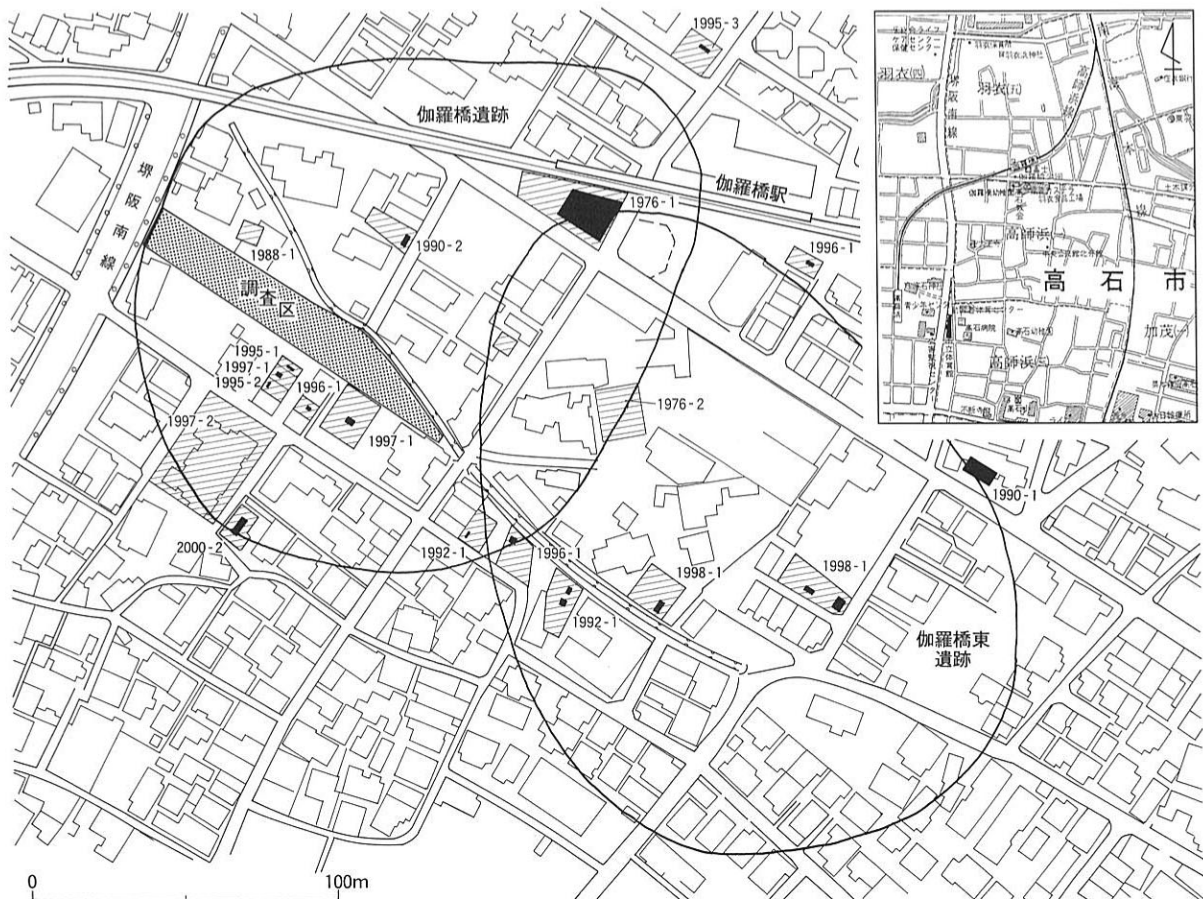
第2節 伽羅橋遺跡の既往調査

伽羅橋遺跡は高石市の西部に位置し、南海本線羽衣駅から分岐している南海高師浜支線の伽羅橋駅の東側に展開する遺跡である。伽羅橋遺跡の東側には、伽羅橋東遺跡が位置している。この二つの遺跡は高石市の発掘調査結果により、現在では同様の立地に展開している性格の類似が認められる遺跡と捉えられている。

この一帯は正平年間に建立された大雄寺の前身寺院としてもっばら有名であるが、瓦の散布が認められる事と関連字名によつてのみの伝承である。昭和30年当該地において、同志社大学先史学会の調査で3本のトレンチを設定したところ、道路状遺構と溝や井戸が検出された。大量の瓦や瓦器が伴うものの、寺院と認定しうる遺構は検出されていない。中世寺院として高石市は専称寺、大雄寺、長安寺などの伝承は多いが、何れも考古学的に立証されておらず、奈良時代の清浄土院と共に不明な点が多い。

しかしながら、高石市教育委員会の地道な発掘調査結果の集積によつて、伽羅橋遺跡では縄文時代～江戸時代まで、以下の事が判明している。

1976年調査	古墳時代溝	(古代～中世の遺物)
1977年調査	近世ピット	(中～近世の遺物)
1988年調査	包含層	(中～近世の遺物)
1990年調査	落込み状遺構	(中～近世の遺物)



第3図 伽羅橋遺跡 発掘調査既往一覽図

1992年調査	井戸、土坑、ピット	(古代～中世の遺物)
1993年調査	遺構、遺物とも検出されない	
1995年調査	瓦溜、落込み状遺構	(古代～中世の遺物)
1996-1	包含層	(中世の遺物)
1997年調査	包含層	(古代～中世の遺物)
1998年調査	包含層	(古代～中世の遺物)
1999年調査	溝、ピット	(古代～中世の遺物)
2000年調査	包含層	(古代～中世の遺物)

18ヶ所の調査の大半は個人住宅等のトレンチ調査で、溝、ピット、土坑、井戸などを検出している。旧石器時代の遺構遺物は現在のところ確認されていない。確実にこの地で生活が営まれたのは、縄文時代晩期船橋式土器の出土によってその開始が確認される。続く、弥生時代は近隣の池上遺跡や大園遺跡のような大規模な集落は確認されていないが、包含層から前期～後期までの土器、石器などの遺物が出土している。特に弥生時代の製塩土器は海浜部ならではの遺物である。古墳時代の遺物は須恵器が多く陶邑窯の所産である。奈良～平安末までは空白地帯である。伽羅橋遺跡と伽羅橋東遺跡の遺物の大半は古代末～中近世の瓦、瓦質土器、国産陶磁器、貿易陶磁である。

平成7年の調査(1995-伽羅橋2地点)から密教系蓮華文軒丸瓦が出土し、大雄寺とは別の、平安後期の密教系寺院の建立が示唆される。

これら平安末～江戸時代の大量の瓦によって、付近に寺院の存在は確実と思われるが、近世の絵図により大王寺の存在を窺うことができても現在確実寺院などは実態が不明である。

- 1 歴史の道調査報告書第一集 熊野・紀州街道調査報告書 大阪府教育委員会 昭和62年
- 2 高石市史 第1巻 平成元年 高石市
第2巻 昭和61年 高石市
- 3 羽衣砂丘遺跡調査報告 高石町史資料第1輯 1959 (伽羅橋駅A・B地点)
- 4 大阪府高石町伽羅橋遺跡調査報告 同志社大学先史学会 1956
- 5 伽羅橋遺跡 伽羅橋東遺跡 水源地遺跡発掘報告書 1980年3月 高石市教育委員会
- 6 高石市文化財調査概要 1988-1 大園遺跡他の発掘調査概要 1993年3月 高石市教育委員会
- 7 高石市文化財調査概要 1990-1 大園遺跡他の発掘調査概要 1991年3月 高石市教育委員会
- 8 高石市文化財調査概要 1992-1 大園遺跡他の発掘調査概要 1993年3月 高石市教育委員会
- 9 高石市文化財調査概要 1995-1 大園遺跡他の発掘調査概要 1996年3月 高石市教育委員会
- 10 高石市文化財調査概要 1996-1 大園遺跡他の発掘調査概要 1997年3月 高石市教育委員会
- 11 高石市文化財調査概要 1997-1 大園遺跡他の発掘調査概要 1998年3月 高石市教育委員会
- 12 古代探求 中央公論社 中世の集落遺跡が語るもの 鋤柄俊夫

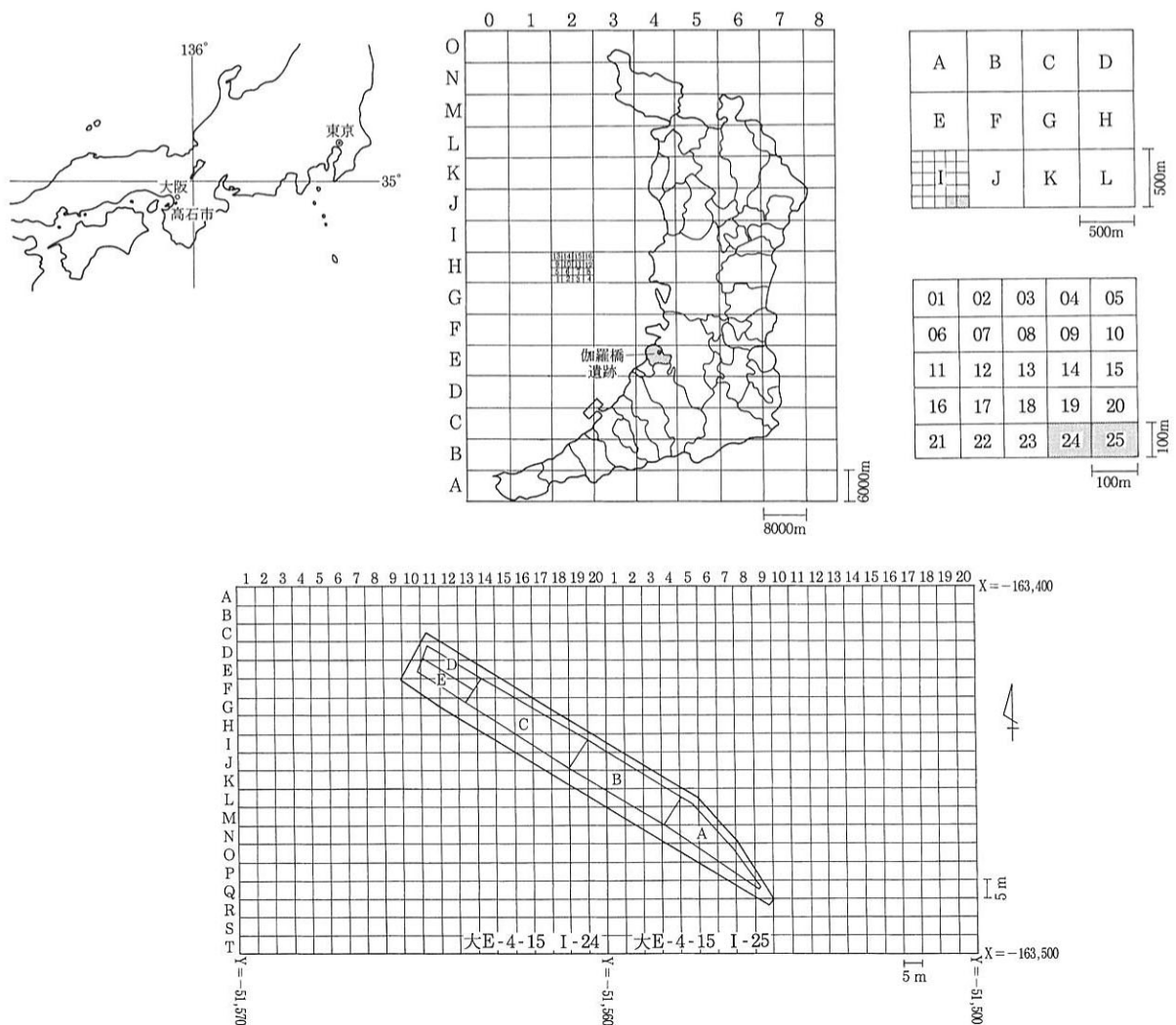
第3章 調査結果

第1節 調査方法

調査地は、府道高石北線予定地部分で、調査区西部は堺阪線に面し東部は旧芦田川を改修した水路に面している。調査区の南北はともに住宅に隣接している。

掘削土の搬出や仮置が不可能で十分な作業ヤードが保てないため、協議の結果、防塵シートで砂塵対策をしつつ反転しながら調査をする事になった。煩雑になる事は否めないが、調査地区を5分割し反転しながら調査を行った。住宅に隣接し航空撮影も不可能のため、レッカー撮影に必要な部分を確保して調査を進め撮影した。また、住宅に接していることにより矢板も設置出来なかつたので、安全確保に調査地上場から一割以上の勾配を保ちながら掘削を行った。

発掘調査は、現代の構造物基礎と盛土を機械掘削し、以下の層は人力掘削を行った。遺物の取り上げや遺構の出土状況等については、当センターのマニュアルにより国土座標系第VI座標系に従って地区割りをし、最小5mのメッシュで取り上げている。(第4図)



第4図 調査地区割図

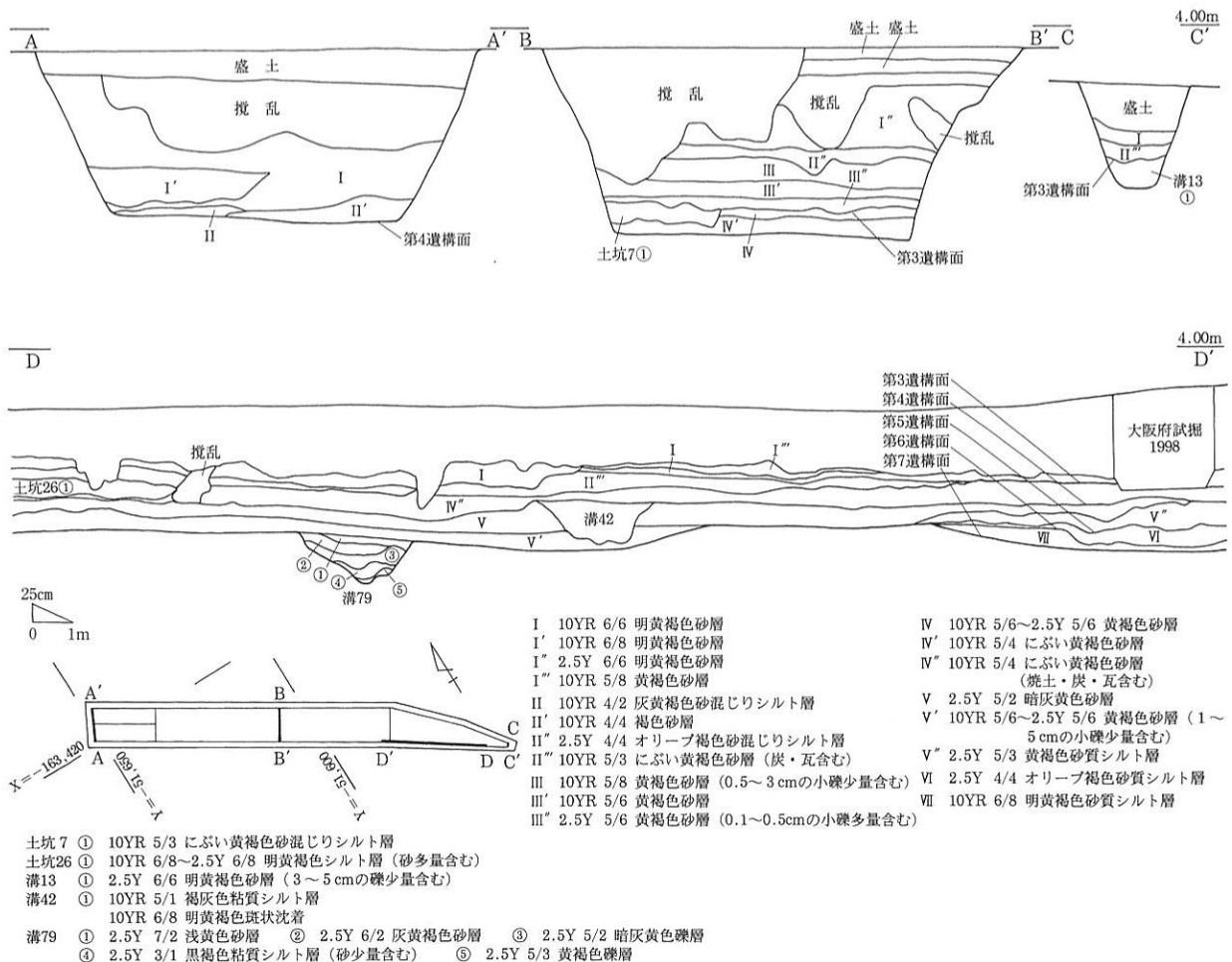
第2節 基本層序

地目はマンション・宅地・駐車場である。

調査区の北側は旧芦田川を改修したため遺存状態が悪く、改修時に古代から現代の遺物が混在した砂層となっている。調査区の西側（A-A'）は、かつて海浜部であった様相を呈しており、黄褐色の砂層であつく覆われている。当時松林であったのか、所々に円形の植物質の痕跡が認められる。調査区中央（B-B'）は若干高い砂丘上にあたり各時代の遺構面を検出したが、何れも砂層である。調査区東側（C-C'）は調査区北側と同様河川改修時に攪乱を受けており、遺存状態は極めて悪い。

宅地に伴うアスファルトと盛土を掘削すると以下の層序となる。

- 第I層 近世以降の黄褐色砂層
- 第II層 中世以降の淡い黄褐色砂層
- 第III層 中世後期の灰黄色砂層
- 第IV層 中世前期の灰白色砂層
- 第V層 中世以前の白色砂層
- 第VI層 湧水層 青灰色及び黒褐色粘質土層
- 第VII層 地山層 砂及び小礫層



第5図 基本層序図

第3節 調査結果

当該地の発掘調査の結果、層位的には8面を検出した（第6図）。

この内、遺構が検出されたのは古代が1面（第7面）、中世が3面（第6・4・3面）、近世以降が1面（第1面）である。第5面と第2面は、この地一帯が砂堆化していた期間で、遺物の細片は若干砂の中に包含されるものの、基本的には砂で覆われて生活面としては利用されていない。

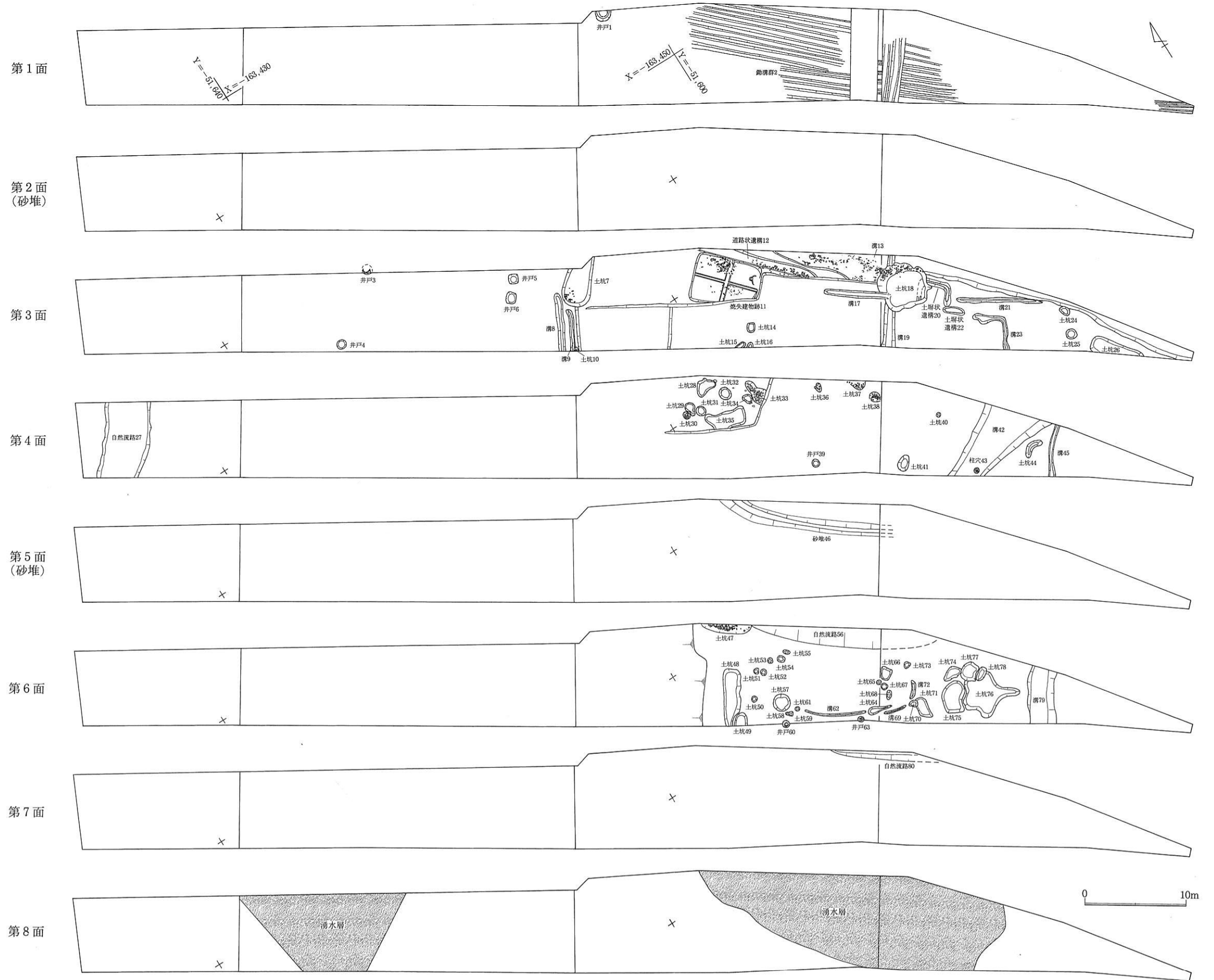
調査区の東側半分が砂丘で一段高くなっており、集中して遺構が検出された。古代では自然河川が一条、中世前半では土器が一括廃棄された土坑をはじめ焼土坑や瓦を再利用した土坑、鉄滓を含む土坑、井戸、溝、自然河川などが検出され、中世後半では焼失建物跡、道路状遺構や溝、旧芦田川などが検出された。近世期は街道が整備されたためか、高石村の中心地からはずれており、近世以降の井戸や鋤溝群がわずかに検出されるのみである。

5地区に分割して調査したため、遺構番号の煩雑化を避けるために、新たに全体遺構図（第6図）において第一面から番号を付している。

調査区全域は、各遺構面が色調が異なる砂層の堆積から形成されており、伽羅橋遺跡は砂堆の上に形成されている。中世に焦土化した一時期の砂は、僅かに炭が混じり堅い砂地であった。その他の遺構面は何れも色調の異なる砂である。現地表より約3m下で検出されたT P 1.1～0.6mの青灰色～黒褐色の粘質シルト層からは湧水が著しく、全地区無遺物層となることを確認し調査を終了した。

出土した遺物の量は、コンテナ数にして約400箱を数える。包含層の出土遺物と、第6面の土坑47、第4面の溝42と土坑群、第3面の建物跡11と溝13がその大半をしめる。時間の制約があったため出土遺物は一覧にまとめた。遺物の詳細は、別途報告の機会に譲りたい。

以下、各時代ごとに報告する。



第6図 全体遺構図

1 古代以前の遺構と遺物（第8～7面）

第8面は白色砂層が広がる面である。調査区全体を数mおきに確認トレンチを設定したところ、2ヶ所の湧水範囲が確認された（第6図）。古代の遺構面である第7面から1.5～2m下に掘削すると、青灰色～黒褐色粘土質層が堆積しており、この層から湧水する。

後述する中～近世の井戸（井戸1、3、4、5、6、39、60、63）は、何れもこの青灰色粘土質土層の湧水層を抜く掘方が検出されている。

T P 1.4m前後で無遺物層となり、地山と判断されたため掘削を完了した。

第7面は、調査区東端で溝状の遺構1条が検出された。

自然流路80 調査区東端に溝肩部を検出した。検出長8mを測る。全体的に東に落ち込んでおり、最深部において東西に流れた形跡が認められた。人為的な溝としての肩部とは考え難く、中世以前の自然流路と判断された。

埋土からは弥生時代の土器片や石包丁（1）などが出土する。上流から土砂とともに運ばれ混入したためか、かなりローリングを受けている。

埋土は全て砂層であるが、下部はやや黒褐色を帯び、常時流水状態あったとは考えられない状況が窺われた。当初、第6面で検出された溝56の最下層かと考えられたが、自然流路80が埋没した後、上面全域が白色砂層に覆われており、流路として機能していない若干の時期があると思われる。この白色砂層には、遺物が包含されない。

2 中世の遺構と遺物（第6～3面）

第6面は調査区東部の脆弱な砂地の上面に当たり、砂層上面で多数の遺構が集中して検出されている。土器が一括廃棄された状況を示す土坑や、井戸、溝等が検出されている。西部は急激に大阪湾に向けて



写真1 第7面 自然流路80（南南東から）

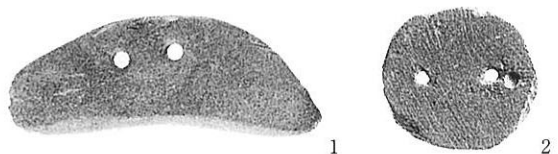


写真2 第7面 自然流路80 出土遺物（1石包丁）

写真3 第6面 自然流路56 出土遺物（2石製模造品）

下降し、荒い砂層堆積となり遺構と遺物の出土は皆無である。第6遺構面の面的広がり不自然に途切れ、西側に急激な傾斜をみせ小さな貝片が混入するなど海砂の堆積層と見られるが、海岸段丘が形成により一時的に海水が付近まで及んだ可能性は高い。

溝79 調査区東端で検出された溝である（写真11）。南北方向に流れる溝で幅2.6m、検出長5.5mを測る。断面はV字状を呈し、深さ0.6mを測る。急峻な流れというより、徐々に砂地を抉る様相を示している。埋土はラミナ状で、出土遺物は全て溝最下層の砂から検出された。土師質土器や、瓦質土器各種の他に、古代に遡る瓦(155)が検出された。本調査地点の南側に、古代の寺院があった可能性を示唆する出土遺物である。

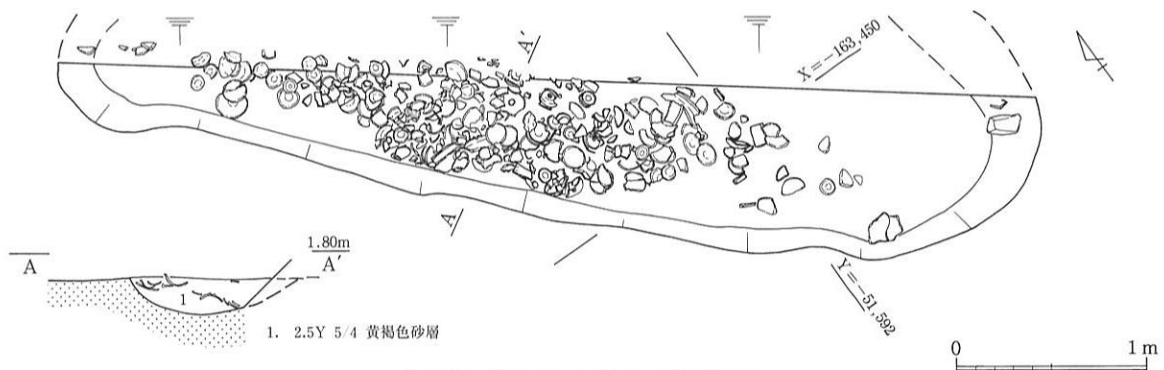
土坑74、土坑75、土坑76、土坑77、土坑78 溝79の西側に検出された不定形な土坑群である（写真11）。埋土は薄い灰黒色の荒い砂である。深さは0.14～0.77mと様々で砂地を人為的に掘り窪めてはいるが、その機能など性格は不明である。いずれも湧水層まで達しており、土坑の最下層から須恵器や瓦器などが出土する。土坑76からは、瓦質皿（8）と瓦器椀（9、10）が良好な状態で検出された。瓦器は外面はなで調整と指頭圧痕が残り、内面は見込み部分に並行暗文を施す和泉タイプのもので、高台は断面が三角形を呈し比較的丁寧に貼り付けている。12世紀末～13世紀代の所産である。

井戸63、井戸60 調査区中央において2基の井戸が検出された。何れも羽釜を井筒に転用している。二基ともに調査区の南端にかかっており完掘はできないものの、円形の堀方が確認された。

井戸60は掘方直径65cmを測り、底部を打ち欠いた瓦質の羽釜が据えられている（第8図）。羽釜内部の砂から、瓦器椀と瓦質小皿が出土する。下層からは、現状でも良好な湧水状態が認められ、周辺で検出される焼土坑や出土遺物に鉄滓や瓦質フィゴなどが認められることから、小規模な鍛冶に関連する井戸の可能性も想定される。羽釜は口縁直径32cm、鏝直径40cmを測り、外面を横方向に削る和泉タイプのものである。

井戸63は井戸60同様、掘方直径60cmを測り、底部を打ち欠いた土師質の羽釜が据えられている。

自然河川56 調査区東端で検出された溝である。肩部のみの検出である。安全のために勾配をつけた調査区の法面にその大半がかかっており、全容がつかめなかった。しかしながら、僅かに検出し得た砂



第7図 第6面 土坑47 平断面図



写真4

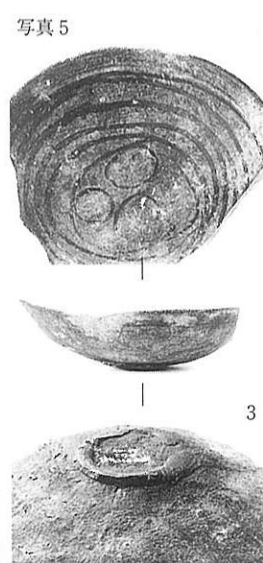


写真5

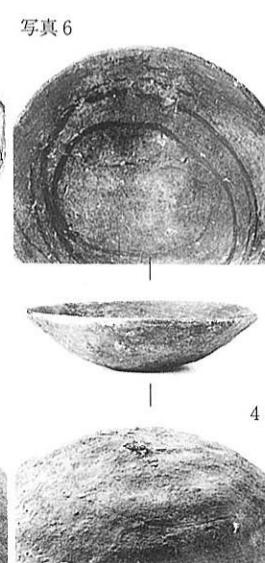


写真6

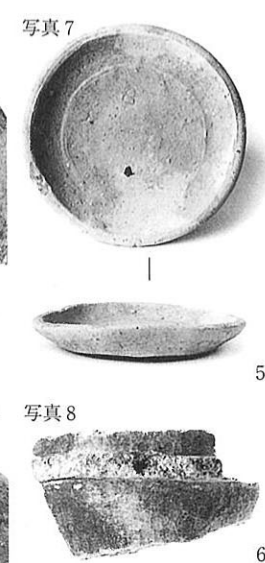


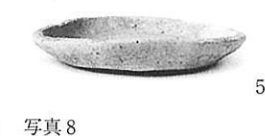
写真7



3



4



5

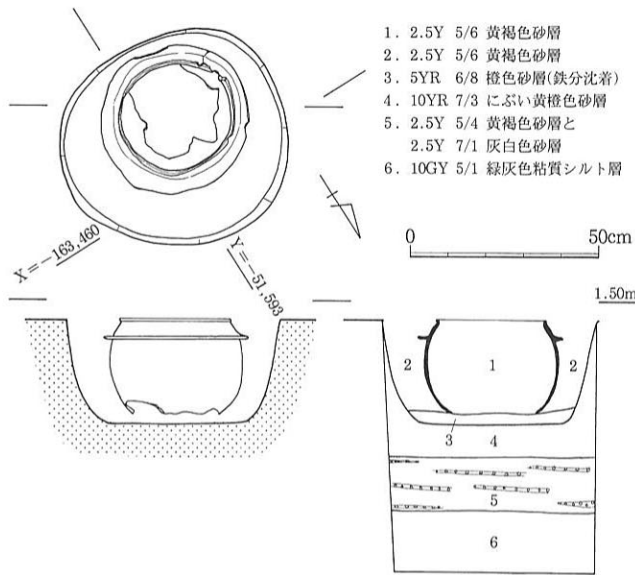


写真8



6

写真4 第6面 土坑47 近景（南東から） 写真5～8 同 出土遺物（3・4 瓦器椀，5 瓦質小皿，6 石塀）



第8図 第6面 井戸60 平断面図



写真9 第6面 井戸60 検出状況(北東から)



写真10 同 出土遺物(7 瓦質羽釜)

の埋土内に、様々な遺物が包含されており古代～中世の遺物が出土する。弥生土器底部や古墳時代以降の滑石製模造品である双孔円盤(2)、国産陶器や瓦器碗など包含される。調査区の東方向に集落の存在が高いと考えられよう。

土坑48 調査区のはほぼ中央で検出した、不定形な土坑である。幅1.7m、検出長5.6mを測る。深さは浅く8cm程で、埋土は砂一層である。砂が一部赤褐色を呈しており、上部に構造物が考えられる。鉄滓が出土するため、小規模な鍛冶炉の可能性も考えられる。第6面には、土坑48の他円形や不定形の土坑、小溝が多数検出されたが、埋土は浅く、出土遺物は中世前半の土師質皿や羽釜の口縁と鏝部分の細片、瓦器碗片で構成されており、遺構の性格を掴むに至らない。

土坑47 調査区東端でその一部が検出された土坑である(第7図)。幅0.9m、検出長5.2mを測る不定形土坑である。埋土は、淡い黄色砂層が一層のみ認められる。全体の約二分の一を検出しており、検出状況から南北5.2m、東西1.8mの不定形土坑と推定される。上層には複弁蓮華文軒丸瓦(126)が検



写真11 第6面 土坑群 遠景(北西から)

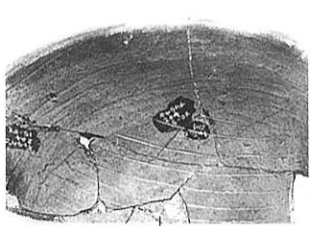


写真13

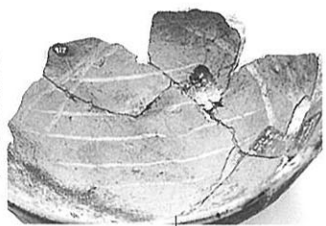
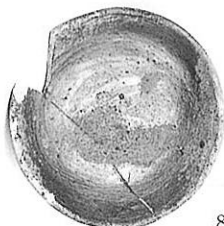


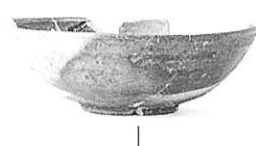
写真14



写真12



8



9



10



写真12～14 第6面 土坑76 出土遺物(8 瓦質小皿, 9・10瓦器碗)



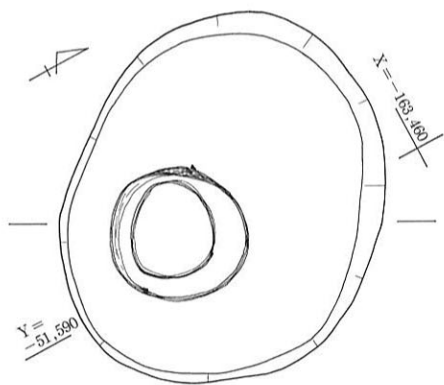
写真15 第5面 砂堆46 検出状況 (南南東から)

出され、下層は多量の土器が一括して廃棄されている。廃棄された土器は、瓦器碗と瓦質小皿、土師質皿が大半を占めコンテナ5箱に及び、石堀の破片も1点認められた(写真4~8)。瓦器はいわゆる和泉型で、扁平化が進むものの内面には螺旋紋の暗文が認められ、僅かに残る円形の貼り付け高台が認められるタイプと、一層小型化が進み高台が消滅した皿様のタイプが同時に廃棄されている。13世紀代の所産である。

第5面

第5面は、第6面の西側に海岸段丘が形成された後、一時的に形成された砂堆上面に当たる。明確な遺構は検出されない。

砂堆46 淡い白色の砂が全域に堆積するなか、一部南北に帯状にたまる自然地形を形成している。砂堆の中に遺物は包含されない。



1. 10YR 6/6 明黄褐色砂層
2. 10YR 7/8 黄褐色砂層
3. 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂層
4. 10YR 5/8 黄褐色砂層
5. 2.5Y 5/3 黄褐色砂層
6. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘質土
7. 2.5Y 5/1 黄灰色砂層
8. 7.5GY 4/1 暗緑灰色粘質土
9. 2.5Y 5/3 黄褐色砂層
10. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘質土
11. 2.5Y 4/1 黄灰色砂層
12. 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂層
13. 2.5Y 5/1 黄灰色砂層



写真18



11

写真18 同 出土遺物 (11瓦器碗)

第9図 第4面 井戸39 平断面図



写真16 第4面 井戸39 完掘状況 (北西から)

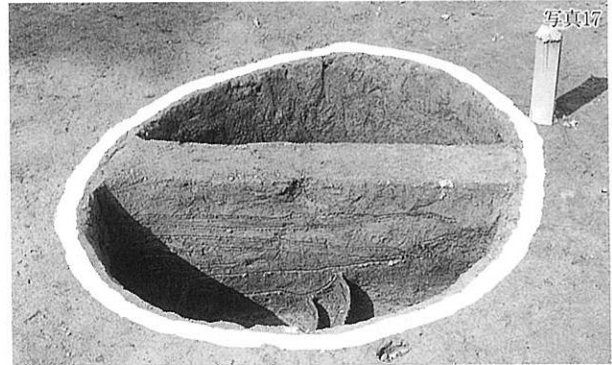


写真17 同 断面 (南南東から)



写真19 第4面 自然流路27 遠景 (南東から)



写真20 第4面 溝42, 土坑群 遠景 (北西から)

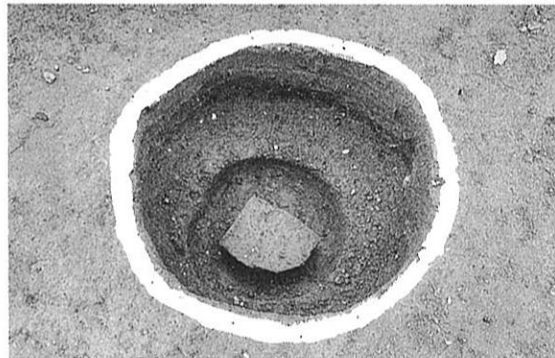


写真21 第4面 礎石43 検出状況 (北北東から)



写真22 第4面 土坑32~34 近景 (北東から)

第4面

第4面は、調査区が大きく3つに分けられる。西端と中央と東端では様相を異にしており、中央の一段高い部分に生活の痕跡が認められるものの、西端と東端は自然地形の様相を呈している。

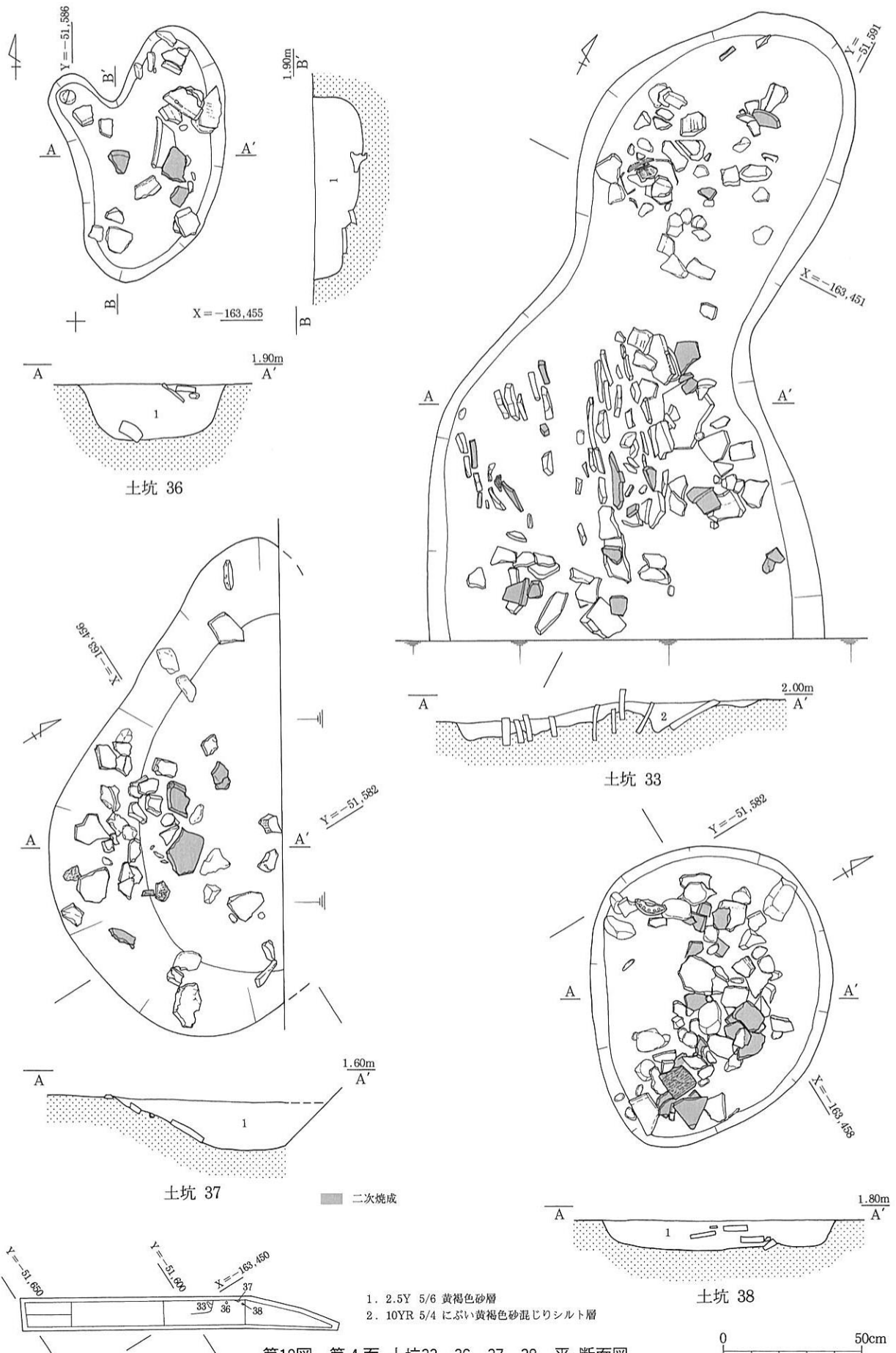
溝45 調査区東端に南北方向の小溝を検出した。幅45cm、検出幅5.2m、深さは浅く11cmを測る。埋土は一層で、淡い黄色の砂層より土師質土器細片が出土する。溝42に流れ込んでおり、砂地における自然流路状のものと思われる。

土坑44 溝45と溝42に挟まれる形で検出した不定形土坑である。幅55cmを測る。出土遺物は土師質小皿と羽釜片、瓦器椀、瓦質小皿と瓦質羽釜や甕である。遺構の性格は不明である。

溝42 調査区東部で検出された東西方向の溝である。西側幅3m、東側に大きく広がり5.7mを測る(写真20)。溝中央に直径35cmのピットが検出された。中央には礎石43が確認され(写真21)、溝を渡る簡便な橋に伴うものかと考えられる。溝42は、深さ36~50cmと比較的浅いものの、溝東部分で検出された出土遺物は、古代~中世と多岐に渡っている。弥生土器甕(29)、須恵器坏蓋(31)と坏身(32)蛸壺(41)、須恵質円盤(52)、瓦器椀(56)瓦質土錘(69)、鬼瓦(82)、蓮華文軒丸瓦(89)、連珠文軒丸瓦(164)などである。調査区西側に古代の集落や寺院の存在が窺われる。

井戸39 調査区南側で検出された井戸である(第9図)。井戸枠に曲物を用いている。堀方は東西80cm、南北100cmのやや楕円形を呈しており、南西寄りに曲物を据えている。材質は杉で、桜の皮で留めている。井戸が埋没する最終段階の層から瓦器椀1点検出した(写真18)。器高が低くなり扁平化した瓦器椀で、高台は僅かに貼り付いている。埋没下限は13世紀代である。

土坑38、土坑37、土坑36 調査区西部で検出された円形及び楕円形を呈する土坑群である(第10図)。土坑38は110cm×86cm、土坑37は180cm×84cm、土坑36は94cm×64cmを測る。何れも埋土は黄褐色の砂層一層である。出土遺物は、二次焼成を受けた瓦の細片ばかりであることから、整地の際廃棄された瓦を埋めたと考えられる。



第10図 第4面 土坑33, 36, 37, 38 平断面図



写真23 第3面 焼失建物跡11 検出状況（北西から）

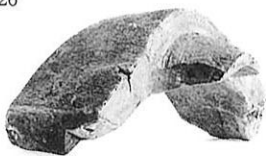


写真24 第3面 焼失建物跡11、道路状遺構12、溝13 検出状況（南南東から）



写真25 同 掘削状況（南南東から）

写真26



12

写真27



13

写真26・27 第3面 焼失建物跡11 出土遺物
（12雁振、13鬼瓦）

炭化物がこびりつくように粘質土で検出されたため、焼失した建物跡と考えられる。

礎石や抜き取り坑やピットなどは検出されなかったため、上部構造について明瞭にし得ない。周辺の砂地には、瓦の散布などは認められず、建物11が当時、瓦葺きであったかどうか不明である。茅葺で、前列のみ瓦のような小堂宇であった可能性も高く今後検討が必要である。建築材として、芻や竹の混入が認められる土壁片（写真28、29）がコンテナ5箱認められる。

土坑33 第4遺構面にはこの時期、調査区中央に一段高い基壇状の高まりを形成しており、土坑が検出される。土坑36～土坑38と同様に瓦の細片が出土する土坑群である。土坑33（第10図）は平瓦を重ねて立てている特殊な土坑である。類例から建物跡の湿度採りの土坑と考えられる。幅140cm、検出長225cmを測る。その他不定形土坑が多数検出されたが、何れの性格も明確にし得なかった。

自然流路27 調査区西端で検出された溝である。幅4.4mを測る東西方向の溝である（写真19）。埋土は54cmと浅いが、これは肩部が砂の風化によって削平されているため、溝最下層と思われる灰白色砂の部分から弥生土器底部や高坏細片、須恵器坏蓋（34）、瓦器椀などが出土する。

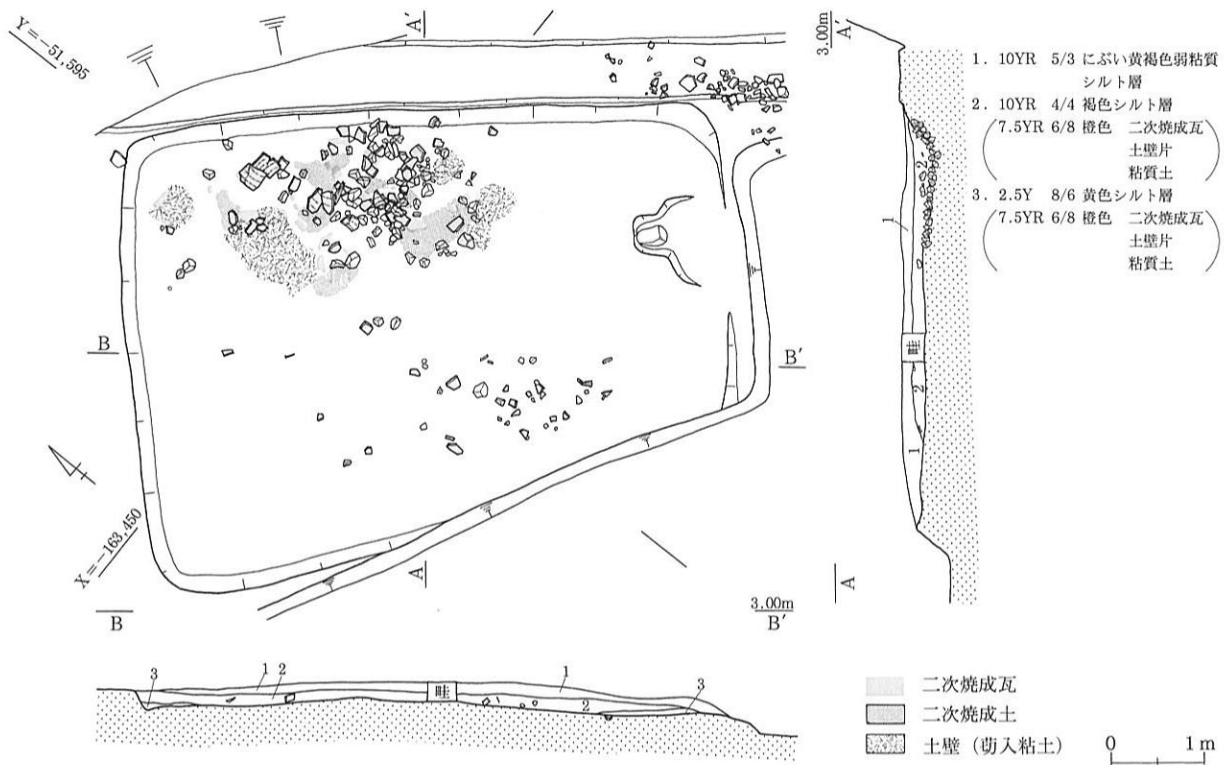
第3面は調査区の一段高い部分が茶褐色を帯びた堅くしまった砂で、周辺全域が類焼したと考えられる面である。砂には小さな炭片が大量に含まれる。

土坑26 調査区南端で検出された不定形土坑である。幅1.6m、検出長5.3mを測る。古代から中世の遺物を包含する。

土塀状遺構22、20 塀状に突き固めた高まりである（写真20）。幅60cm、高さ45cmを測る。周辺の砂や土を利用したのか、瓦器椀片や羽釜片が混入している。

土坑18 480cm×525cmを測る廃棄土坑である。主に瓦片を大量に廃棄している。

焼失建物跡11 調査区中央の高まり部分に、4.9m×6.6mを測るやや長方形の建物跡を検出した。床面と見られる部分は赤褐色を呈しており、



第11図 第3面 焼失建物跡11 平断面図

建物の下部構造である基礎部分は、砂地を丹念に整地している。40cmほど掘り下げ、最下層部分に薄く小礫を敷きつめるようにしている。整地層には、二次焼成を受けた小石材がコンテナ20箱、砥石(74)や瓦器片などの土器類と瓦破片がコンテナ30箱分包含されていた。

建物11の出土遺物は、この基礎部分に用いられた層から出土しており、建物の創建及び焼失時期等の年代については、時期を明確に出来る遺物はなく不明である。整地層に含まれる巴文軒丸瓦の様式から、整地層の上限を鎌倉時代以降と考えられる。

特筆すべき遺物として、今回遺構から出土した古代の瓦片があげられる。雁振瓦片(12)や有角鬼瓦の破片(13)が石材と共に用いられており、他に瓦片を再利用し蓮華文軒丸瓦(84)や唐草文軒平瓦(131)、連珠文軒丸瓦(143、150)などの出土によって、付近に瓦葺建物である古代寺院の確実な存在を示すものといえよう。

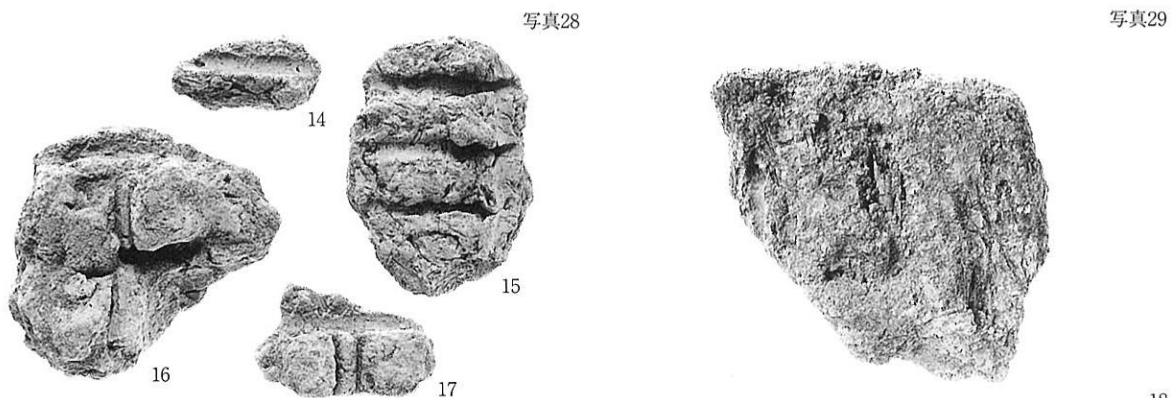
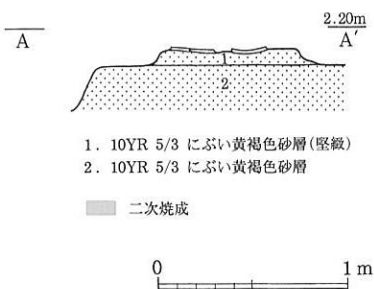
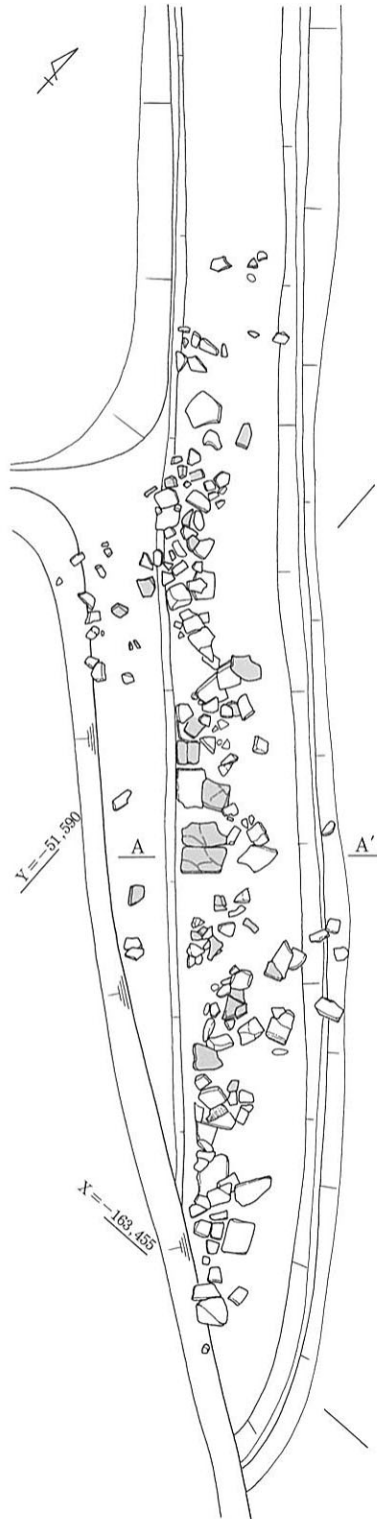


写真28 第3面 焼失建物跡11 出土遺物 (14~17壁 竹材)

写真29 同 (18壁 切入)



第12図 第3面 道路状遺構12 平断面図

道路状遺構12 焼失建物跡11の東側に、建物に沿う形で南北に延びる道路状遺構を検出した(第12図)。幅110cm、高さ8cm、検出長11mを測る。白色砂を突き固めた盛り土の上に、平瓦の破片を平らに敷き詰めて道路としている。この瓦も二次焼成を受けており、道路部分も延焼したと思われる。

昭和30年に同志社大学の発掘調査において道状遺構が検出されたが、方向や当時の出土遺物等相違点も多くトレンチの位置が不明瞭なため同様の遺構か今後検討を要する。

溝13 道路状遺構の東に、東側に傾斜を見せる溝を一条検出した(第13図)。検出幅30cm、検出長4.25mを測る。現水路改修時に上層は削平されているが、溝最深部が残存しており旧の芦田川と考えられる溝である。

溝の西肩には瓦片が大量に検出される。遺物の時期には、二時期あり、上層が13世紀を中心とした瓦と羽釜等、下層が12世紀以前と考えられる瓦と瓦器等の遺物である。大半の遺物が瓦細片で、二次焼成を受けている。

上層の出土遺物の中に火焰宝珠文軒平瓦(94)が出土したことで(写真32)、付近に密教系寺院の存在が明らかとなった。当時火災にあった寺院の瓦を廃棄したことが窺われる。瓦以外には瓦質羽釜片、瓦質甕(湊焼き)、土師質蛸壺片が出土した。瓦器廃滅以降の時期と考えられる。

下層の遺物は、中世の瓦が大半であるが古代の遺物も包含する。弥生土器細片、須恵器蛸壺(38、39、42)などである。瓦は鬼瓦(77)、蓮華文軒丸瓦(81、85、86、87、91)が出土する。文字瓦(93)も出土している。特筆すべき遺物として、千体仏(55)が一体出土した(巻頭カラー)。ほぼ完形で9.8cmを測る。うっすらと胸元に朱が認められる。台座には孔が穿たれ、差し込む形態の小型の土製小地藏である。

溝13で検出された遺物は何れも廃棄されたもので、原位置を保つものではないが、付近に寺院の存在を十分示唆するものである。玉縁の形状と瓦当文様から、六段階(図版7下)に分類可能である。溝13は

写真30

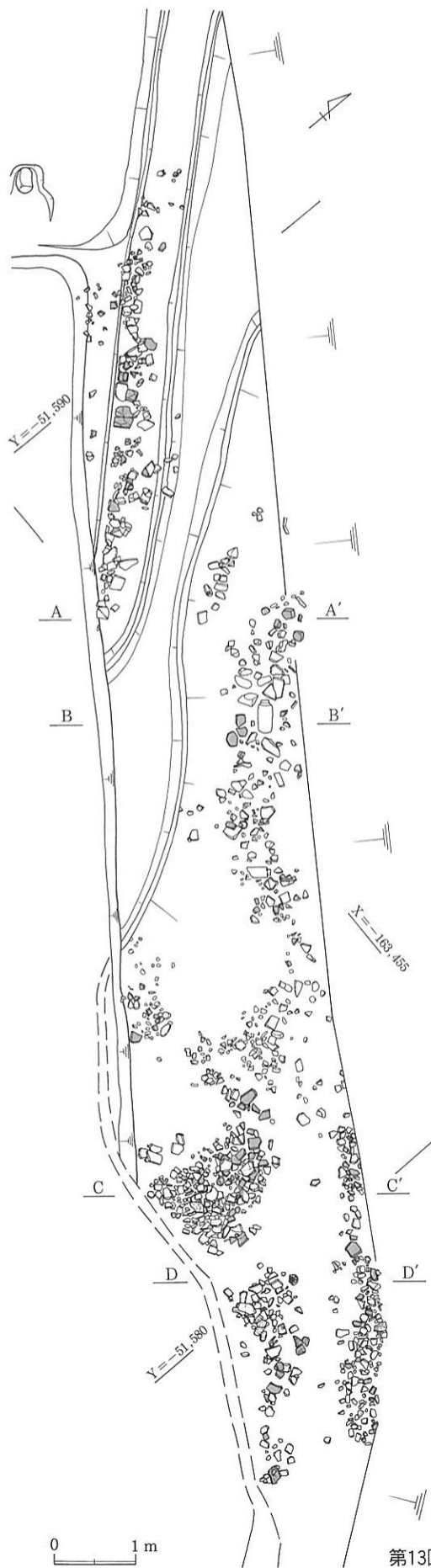
写真31



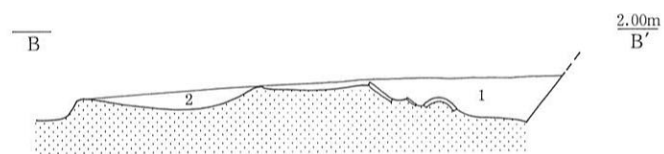
19

20

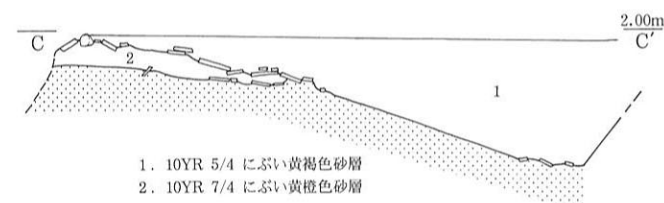
写真30 第3面 包含層 出土遺物(19蛸壺) 写真31 第3面 溝13 出土遺物(20蛸壺)



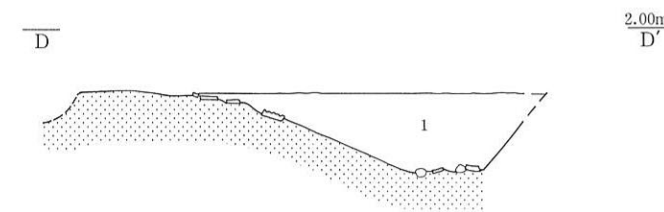
1. 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂層
2. 10YR 7/3 にぶい黄橙色砂層



1. 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂層
2. 10YR 7/3 にぶい黄橙色砂層



1. 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂層
2. 10YR 7/4 にぶい黄橙色砂層



1. 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂層

■ 二次焼成

第13図 第3面 溝13 平断面図

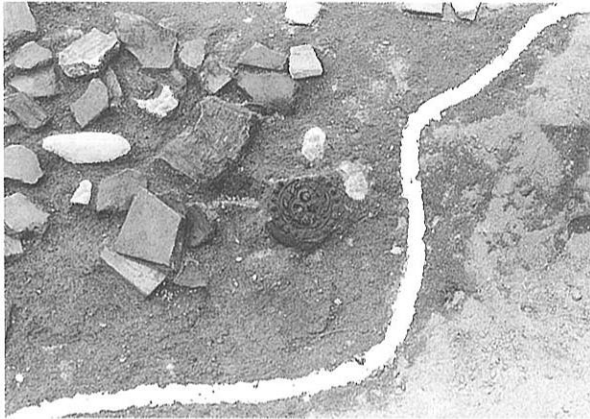


写真32 第3面 溝13 遺物出土状況（東から）



写真33 第3面 溝13 遺物出土状況（北から）

これら全段階の遺物が包含される。量的には3～5段階の遺物が大半を占める。これらを大別すると、平安後期に帰属する遺物の一群は、蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦から構成され、平安末から鎌倉時代を中心に帰属する一群は巴文軒丸瓦と連珠文軒平瓦から構成される。その他、量的には少ないが室町時代と江戸時代の遺物も包含される。

遺物は砂を多く含む荒い胎土である。二次焼成をうけ、完形は一点も無く全て破片である。また砂地でローリングを受けたためか、遺存状態は必ずしも良好とは言えない。

蓮華文軒丸瓦81は単弁八葉蓮華文である。やや薄い花卉が特徴で、瓦当面は平坦である。外区内縁には唐草様の文様が看取される。中房には連子が2個残存している。推定1+8個の連子を配するものと思われる。平安時代後期の所産と考えられる。

蓮華文軒丸瓦85は、外区内縁に珠文をめぐらすもので9個残存している。復元推定34個である。内区は僅かにのこる蓮華文から、126の複弁八葉

蓮華文と同様の文様と思われる。復元直径は15.6cm。平安時代末に比定される。

蓮華文軒丸瓦85、86も85S同様の複弁八葉蓮華文軒丸瓦の破片である。平安時代後期の所産と考えられる。

蓮華文軒丸瓦91は複弁八葉蓮華文である。外区の圏線は一条ではやや太い。中房の周囲には雄蕊帯をめぐらす。中房には連子が2個残存している。推定1+8個である。平安時代末に比定される。

文字瓦93は瓦当面に「□陀佛」の文字を有する軒丸瓦である。外区に圏線が一条めぐらすもので、瓦当には蓮弁台中央に文字が配されている。瓦当面全体に砂が付着している。瓦当部分の接合箇所が明瞭に遺存する。鎌倉時代以降に属する。

火焰宝珠文軒丸瓦94は珠文を23個配し、珠文の内側に圏線を一条めぐらすものである。瓦当中央には、同様蓮弁台に宝珠が配され、周辺を囲むように火焰文が加飾されている。直径はやや楕円形を呈しており16.2×推15.1cm。裏面に接合部分の刻み目と撫調整や指頭圧痕明瞭に遺存する。鎌倉時代以降に属する。

巴文軒丸瓦104は直径15.2cmを測る。外区に圏線を明瞭にめぐらすものである。巴頭部は厚みをもって尖り互いに接している。左三ツ巴で尾は長くのびて圏線となる。珠文は23を数える。鎌倉時代に属する。

巴文軒丸瓦98、99、100は巴部分がやや扁平になり珠文が大振りとなる。鎌倉時代以降に属する。

巴文軒丸瓦114、116、117は直径12cm前後のやや小形の瓦当である。同時代の道具瓦乃至は築地や井戸などに使用されたものと考えられる。

唐草文軒平瓦156、158ははわずかに外区の意識が認められる。唐草文の一部が遺存する。何れも中心



写真34 第3面 土坑7 近景(東から)



写真35

写真35 同 出土遺物(21硯)

の飾りは不明である。鎌倉以降に属する。

連珠文軒平瓦149は全周する外区を持ち、珠文は10個残存する。

連珠文軒平瓦167は外区は僅かに残るものの、珠文は大きく平坦になっている。室町時代以降に属する。

溝9 溝8 調査区中央に小溝2条検出した。いずれも浅く埋土は黄褐色の砂一層である。土師質土器細片を包含する。

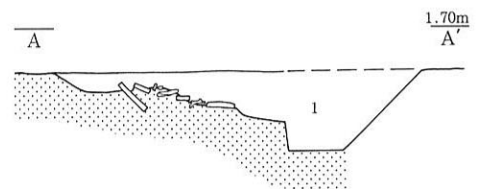
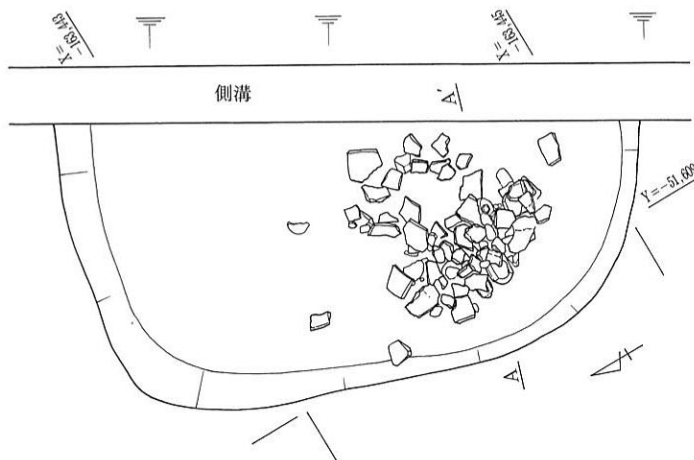
土坑7 調査区中央に、推定南北3m東西2m、深さ40cmを測る土坑が検出された(第14図)。埋土は溝9、溝8同様、黄褐色砂層である。上部が削平を受けており、周辺の包含層に接合できる遺物が出土している。

土坑の南側の一ヶ所に遺物が集中して出土しており、他の土坑同様に二次焼成を受けた瓦細片が出土することから、廃棄土坑と考えられる。瓦の他に方形硯(21)、青磁碗高台片などが出土した。瓦は方形硯で相当な使用が窺われ隅の部分の磨耗が著しい。青磁碗は蓮弁が退化したもので、14世紀代の所産である。

その他、土坑と溝が検出されたが性格等不明な点が多い。

井戸5 調査区北端に素掘の井戸が一基検出された(第16図)。掘方は方形を呈し、一辺約85cm、深さ90cmを測る。井戸枠は検出されなかったが、中央を円形に掘り窪めており、埋土は上層の砂が入りオリブ褐色の砂層が認められる。井戸の最下層から、瓦器碗と瓦質小皿数点が検出された。14世紀代の所産。

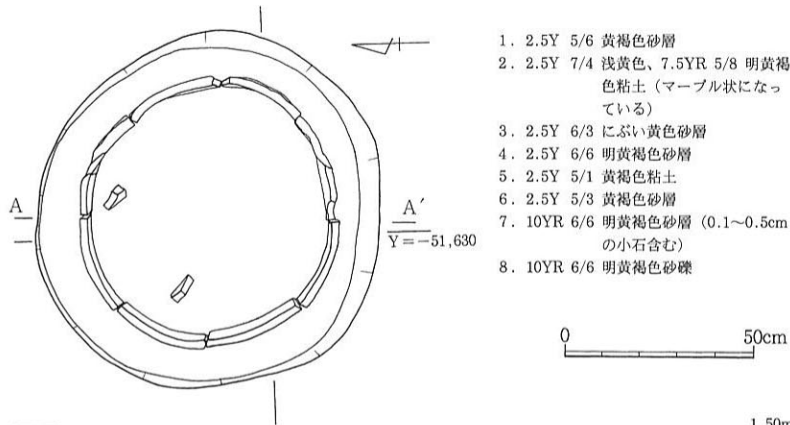
井戸4 調査区西端に瓦積井戸を検出した。(第15図)。井戸3と同様瓦を三段に積み上げている。直径90~95cm、深さ95cmを測る。埋土は、黄褐色砂層で、出土遺物は包含されない。瓦の時期から15~16世紀の所産と思われる。現在も湧水している。



1. 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂まじりシルト層

0 1m

第14図 第3面 土坑7 平断面図



1. 2.5Y 5/6 黄褐色砂層
2. 2.5Y 7/4 浅黄色、7.5YR 5/8 明黄褐色粘土 (マーブル状になっている)
3. 2.5Y 6/3 にぶい黄色砂層
4. 2.5Y 6/6 明黄褐色砂層
5. 2.5Y 5/1 黄褐色粘土
6. 2.5Y 5/3 黄褐色砂層
7. 10YR 6/6 明黄褐色砂層 (0.1~0.5cmの小石含む)
8. 10YR 6/6 明黄褐色砂礫

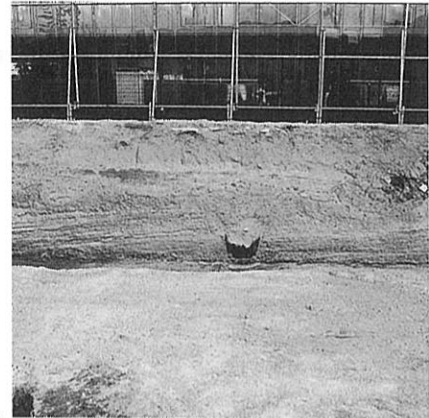
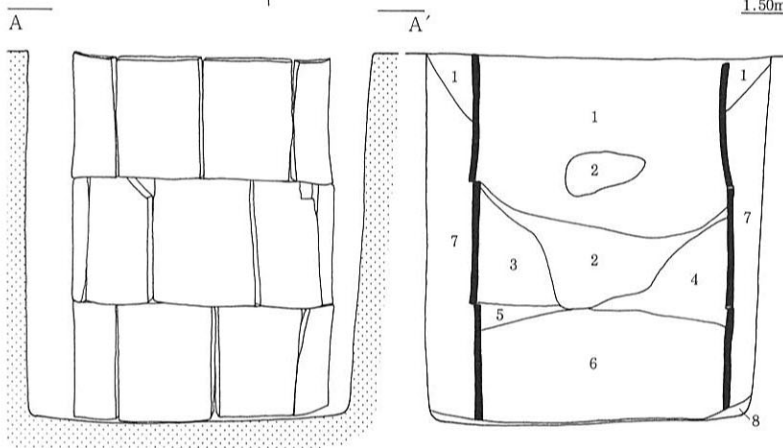


写真36 第3面 井戸3 検出状況 (南南西から)



第15図 第3面 井戸4 平断面図

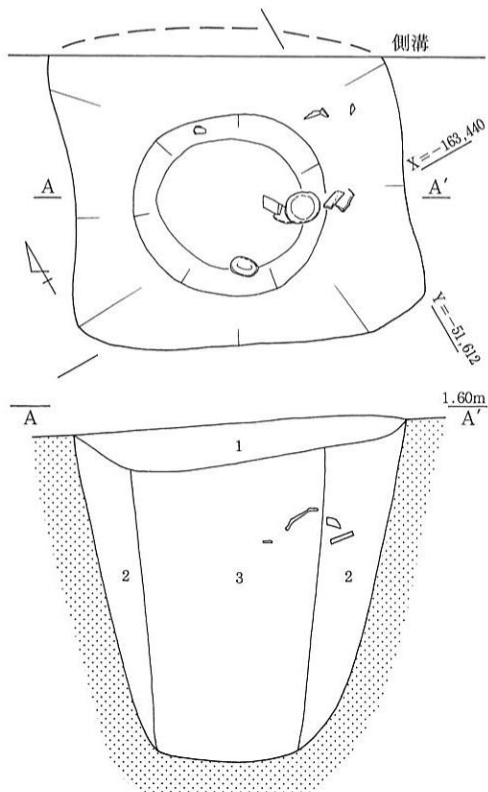


写真37 第3面 井戸4 検出状況 (東から)

井戸3 調査区北端の法面に瓦積みの井戸を検出した(写真36)。井戸瓦を三段に積み上げている。掘方は直径90cmを測る。

第2面 砂堆

調査区全域に渡って堆積を見せる砂層である。砂色は第7面の白色砂とも第5面の黄色砂とも違い、灰白色を呈している砂である。15世紀の遺構面上面を厚く覆い、大阪湾から旧芦田川、つまり西から東に傾斜を見せる。出土遺物は殆どなく、砂は40cm~70cm測り、短期間に埋没したと考えられる。出土遺物と思われていた遺物の大半は、C~E地区に建っていたマンション解体時に深く攪乱を受け近現代の遺物と下層の中世遺物が混入している。攪乱の無い部分の砂には殆ど何も含まれていない。



1. 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂層
2. 2.5Y 5/6 黄褐色砂層
3. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂層

第16図 第3面 井戸5 平断面図

3 近世（第1面）

第1面は、調査区東半に近世以降の井戸1基と鋤溝群2を検出した。

鋤溝群2 調査区東半で検出された小溝群である。調査区西半はマンションなどの基礎でかなり削平をうけ第1面の遺存状態は極めて悪く、東半部分でのみ確認された。ほぼ東西方向の溝で、幅40～60cmを測る。深さは10～25cmである。埋土は黄褐色砂層一層で、近世の陶磁器細片が包含されるが詳細な時代については不明である。溝は旧芦田川と並行して検出されており、周辺の土地利用から近現代の耕作面と考えられる。

井戸1 調査区ほぼ中央の北端に、井戸が一基検出された。調査区の北法面にかかっており、二分の一が検出された。掘方は円形で、直径140cmを測る（第17図）。深さは330cmである。

井戸枠の遺存状態は良く、下部は杉材で3段の桶巻きの枠を積み、上部は井戸瓦を6段積んでいる。最上部はすでに削平されており、埋土に同様の瓦が出土することから瓦が6段以上積んであった可能性は高い。瓦と瓦の隙間を黄褐色の粘土を帯状にして埋め込んで、補強している。使用している瓦は縦横がほぼ正方形を呈し、外面にヘラ状に八の字形に刻みを入れる井戸瓦である（写真40、41、42）。掘方は荒い砂を掘り抜き、湧水層まで達しており現在も水が湧いている。

上部の攪乱部分が幅2mを測る。位置関係が不明であるため断定はできないが、不自然な埋土で、昭和35年の同志社大学のトレンチ調査の際に検出した井戸の可能性が高い。

その他に、近現代の遺物を併せて報告する。

近現代遺物は、各地区の包含層や溝上層に包含されている。その他、周辺は戦前から別荘地帯であったためか洋館が多く建て替えなどの際の埋め立てで、銅板染付碗や近世陶磁器が大量包含される攪乱土坑が検出され、大量の遺物が包含されている（写真図版11）。

また、遺跡が海浜部に位置するため、包含層や砂堆、溝に自然遺物が包含される。（写真11）

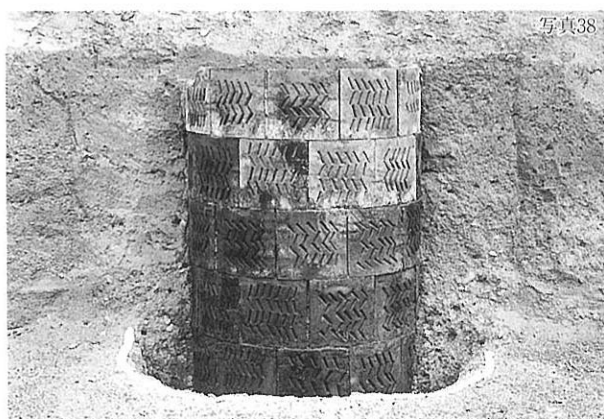


写真38 第1面 井戸1 検出状況（南南西から）

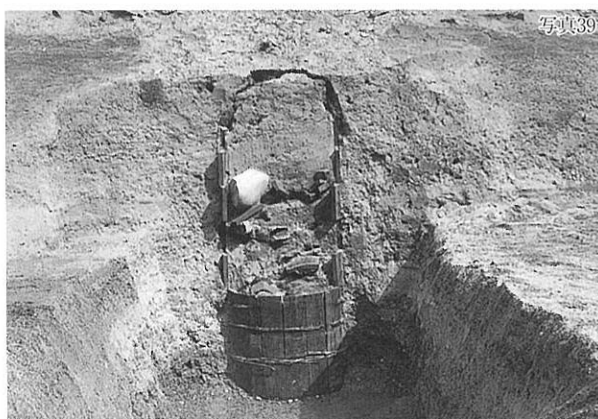
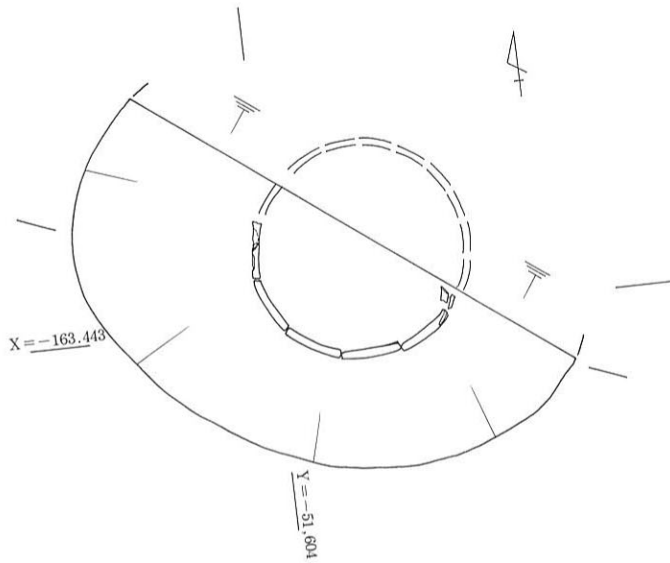


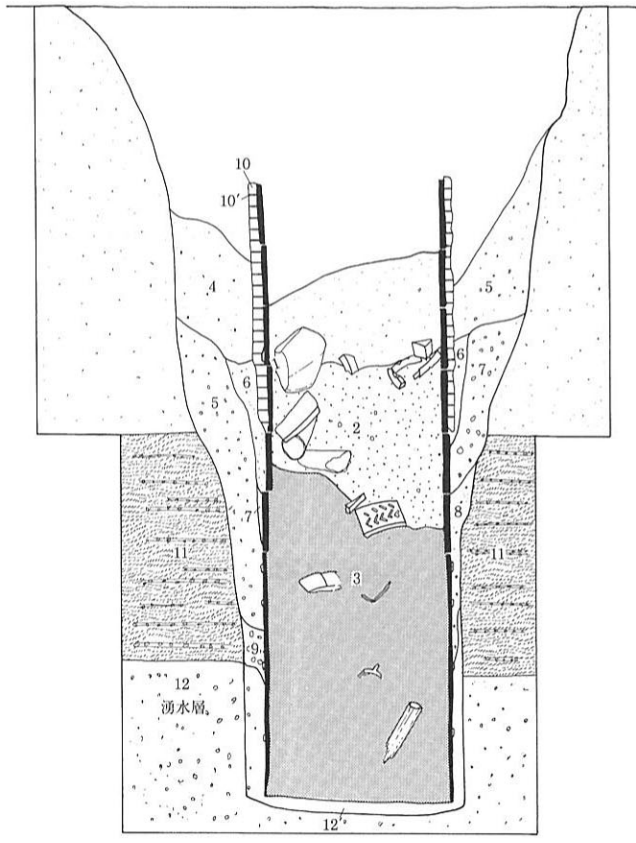
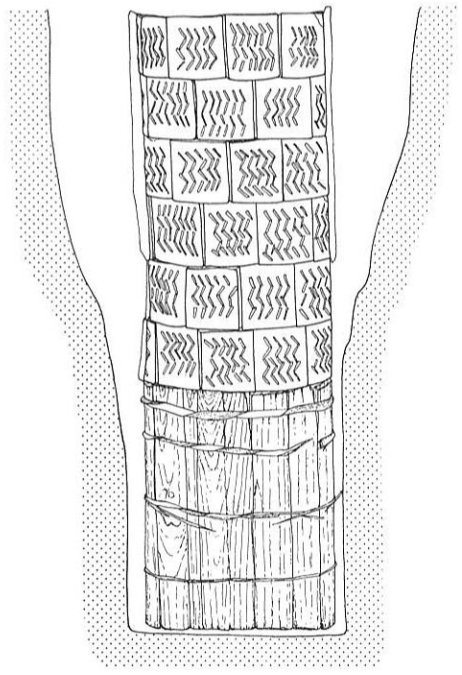
写真39 同 掘削状況（南南西から）



1. 2.5Y 7/2 灰黄色砂層
2. 2.5Y 7/3 浅黄色砂層 (レンガ・瓦)
3. 2.5Y 7/3 浅黄色砂層
4. 2.5Y 6/3 にぶい黄色砂層
5. 2.5Y 6/3 にぶい黄色小礫層 (0.2~1 cm)
6. 2.5Y 6/3 にぶい黄色砂礫層
7. 2.5Y 6/3 にぶい黄色砂・小礫層
8. 2.5Y 5/3 黄褐色砂層
9. 2.5Y 7/1 灰白色砂・中礫層 (3~5 cm)
10. 2.5Y 7/8 黄色粘質土
- 10'. 2.5Y 7/8 黄色砂層
11. 2.5Y 5/2 暗灰色
12. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂・小中礫 (1~5 cm)
- 12'. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂層



3.00m



第17図 第1面 井戸1 平断面図

写真40

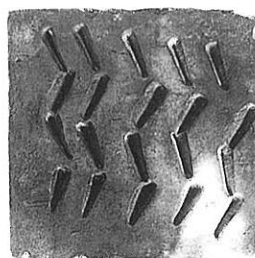


22

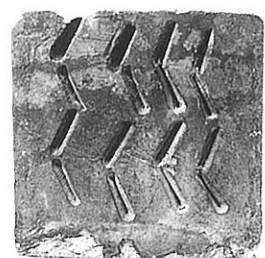
写真41



写真42



23



24

写真40~42 第1面 井戸1 出土遺物 (22~24瓦)

第4章 まとめ

伽羅橋遺跡の「伽羅」は黒沈香という香木の一種で、芦田川にかかる高師浜4丁目の橋が伽羅材（高級木材または唐風設計の橋）であった言い伝えから、この材を売ったところ銭千貫になったと言う由来のある橋である。この橋は慶応元年に架け直し、御影石で新しい橋をかけた。現在は臨海工業地帯の高砂公園に移築している（写真扉）。

この地は古くは万葉集にその名があり、一大伴の高師の浜の松が根を枕き寝れど家し偲はゆー古代から風光明媚な海岸であった事が窺われる。伽羅橋遺跡の東には延喜式内社の羽衣浜神社が、同西には同じく延喜式内社の高石神社が位置し、古代から開発が早い地域であったと考えられる。大阪湾に沿って紀州街道と熊野街道が走行し、周辺は陸海路ともに交通の要衝と考えられる。

今回、高石北線道路建設予定地部分の僅か1100m²の発掘調査によって、大きく三時期の遺構が検出された。古代は自然地形として発生した流路から弥生時代以降の遺物が検出された。特に中世は砂堆による空白期を挟んで前半と後半に分けられる。従来から大雄寺の前身寺院として一部の瓦から、古代寺院に遡る印象を強く持たれていたが、本調査区域の調査成果からは古代に遡る瓦は溝や包含層から数点出土したものの、寺院に伴う遺構は検出されなかった。土器は砂層から黒色土器高台部分の破片1点とやや古い様相を持つ瓦器のみで、甚だ心許ない出土量である。考古学的知見からは、伽羅橋遺跡本地点は中世期を中心とした遺跡と言わざるをえない。近世は高石村と高石北村からはずれた海沿いに位置するためか、主だった遺構の検出は認められない。

今回出土遺物から特筆すべき事柄として3点あげることが出来る。

1) 泉州地域では初の出土例の火焰宝珠文をもつ瓦(94)は蓮台の上に3つの宝珠を配し、火焰で装飾する。この様式は、鎌倉時代以降に仏舎利等で多用される形式であり貴重な資料である。93は文字瓦破片で、「□陀佛」の文字が読みとれる。文字瓦と火焰宝珠文の下部にある蓮弁であるが、蓮弁端部が外反せず直線的に伸びる形状からみて室町時代に属するものと判断されるが、何れも類例に乏しく今後の検討を要したい。

2) 溝13肩部出土の千体仏(或いは万体地藏)一体出土した事で、中世信仰の一形態が考古学的に明らかとなった。55は9.8cmの土製小地藏で剃髪で左手に宝珠を持ち、直衣姿で簡素な蓮華台座に立っている。台座裏面の中央には小孔が穿っており、台に刺すようになっている。型造りで、表面には胸元と唇部分にうっすらと朱が残存する。若干時代は下るが、高石市綾園に位置する専称寺蔵の厨子入千体地藏菩薩と同様の小像、乃至は、勧進の為に多数造られる奉納仏と思われる。当時素朴な聖徳太子信仰や弘法大師信仰の他に密教信仰、地藏信仰や陰陽道信仰また現世利益を願う各種の俗神信仰があったのは、戦乱の世に雑多ながらも浄土信仰だけでは無かった庶民性が窺われる。勧進等の奉納仏をおさめるにはどのようなお堂であったか、また納骨の性格を有していたか疑問の残るところである。

井戸や宗教儀式関係で用いられるにはあまりに多い羽釜は、湊焼きとともに蔵骨器として用いられていた可能性もあり今後検討したい。

3) 13世紀代と考えられる土器を一括廃棄した土坑47から、推定南北5.2m東西1.8mの小さな土坑に数百という大量の瓦器、瓦質小皿、土師質小皿、石塼片が出土している。鋤柄俊夫氏の清浄感と中山均

氏の一昧神水など魅力的な思想は今後の検討課題としたい。この土坑に伴う性格の遺構群が、西側に遺存されている可能性は残しておきたい。

なお昭和30年の同志社大学発掘の遺構とは検出面の違いがあり、また調査地法面で確認の結果、土坑は北方向に続く事はなく一つの遺構として完結していたため、同一の遺構ではないと考えられる。

以上の3点が今回の発掘調査によって、新たに伽羅橋遺跡の中世資料としての増加が認められた。

さらに遺構からは次のような所見がえられた。調査区より、平安末の瓦片、鬼瓦や復古調の瓦当面など、平安時代には当該地付近に何らかの寺院建築が在ったであろう事は想像に難くない。奈良時代には清浄寺、清浄尼寺の言い伝えもあり、紀州街道に面し、奈良時代から高師浜と歌に詠まれる程の環境である事を考えれば相当開発が進んだ地域と考えられる。特に高石神社や浜神社等の式内社の存在を考えれば、立地条件は申し分ない。

しかしながら当該地において検出された遺構の密集度は、調査区東部に集中し、比較的細かい砂地において、中世を中心とする遺構と遺物が検出されるものである。中世の度重なる戦火による焼失の他に、本遺跡の立地条件からすると先行する生活面がその時点で流出している事も否定出来ない。第2、5、7面で短時間で堆積している砂堆を勘案すると、西部に中世、また中世以前の遺構が広がる可能性は捨てきれない。

調査地区中央から焼失した建物跡と道路状遺構が検出された。創建時期は不明であるが整地層から中世以前の瓦や土器が出土することで、古代に遡る寺院とは考え難い。

平安時代後期以降には泉州地方に寺院遺跡が増加する。しかし寺院の規模や確実な位置が判明していない例が大多数である。数点の瓦と古文書に記されている寺名は依然不明な点が多い。この時期、如何に庶民層にまで仏教が浸透していたかが窺われるものの、集落に1堂といった規模であった事は想像に難くない。

現在、調査地西に位置する「大王寺」は浄土宗鎮西派に属し、寛永年間（1624～1643）円雲上人により再建された。本尊である鎌倉時代の阿弥陀如来座像（島根県邑知郡浄円寺の仏像を戦後に大王寺に寄贈）は江戸時代の寺院とは直接関係がある訳ではない。しかし寛政元年（1789）大王寺の土中より出土した鎌倉時代の懸仏は前時代の寺院の遺物と考えても良いであろう。火災にあって傷んだ状態で、鏡台を欠損した十一面観音座像出土は、この地がかつて寺院であった可能性を高くしている。

以前にはこの周辺一帯は南北朝時代（1342～1369）に南朝の後村上天皇の勅願によって創建された「大雄寺」があったとの言い伝えがあり、後村上天皇が三光国士に命じて天正年間（1346～1370年）に建立した禅宗寺院との記述が一人歩きしている感が否めない。付近の字名は集落「大王寺」と「垣外」で、寺院と付属施設をも含む集落であった可能性は高いが、考古学的に確実な遺構検出が成されていないため、大量の瓦と同時期の瓦器によって平安末～中世の大寺院伝承となっていた。高石市内の伝中世寺院は4箇所、等乃伎神社、清高小学校敷地、専称寺境内、伽羅橋である。何れも大量の瓦が散布し、集落を伴っている事から南北朝以降の度重なる火災や争乱出焼失したと考えられる。確実な遺構が伴わないために依然実態が不明で、大園遺跡の博仏や伽羅橋遺跡の伝懸仏等で白鳳時代や平安時代という伝承で今日に至っている。

伽羅橋遺跡から出土した遺物はコンテナ400箱である。大半は中世の軒平瓦と若干の軒丸瓦、そして瓦器と羽釜片である。瓦当は全て写真に掲載した。丸瓦は本瓦覆丸瓦（玉縁）で、行基葺丸瓦は確認さ

れていない。今回時間的な制約もあったため、同汎瓦についての報告と今後遺構の詳細な時期検討を平瓦と瓦器の摺り合わせを行い、寺院成立の展開過程や出土遺物に見られる様相変化と共に別途報告したい。

なお、中世の開始を何時にするかは、1960年代にこの伽羅橋遺跡をはじめとして、北は青森県十三湊遺跡、静岡県一ノ谷中世墳墓群、広島県草戸千軒遺跡、大分県田染荘、沖縄県の勝連城等あまた中世の遺跡が発掘された後、当時より現在まで問題提起されている。今や文献史学の立場からの中世観より発掘調査によって得られた考古資料の増大によって、中世の開始は古くなる一方で幅を持つ様々な立場の開始時期に、従来一般的には12世紀を妥当な線引きとして取り扱っていた。今日膨大な量の土器研究によって、瓦器の編年細分化・山茶碗の出現と輸入陶磁器の出土量増加などから11世紀中葉以降に中世の始まりととらえる説を採用していることが多いが若干の時期の認識差は生じている。これらの点を踏まえて、今後の課題として、伽羅橋遺跡の時期についても再度さらに検討する必要がある。

遺物 No.	器種	出土地点	地区	遺構	時代	写真 No.	写真 図版	法量(cm)	備考
1	石包丁	大E-4-15 I-25 J1	B	自然流路80	古代	2		長10.8×幅4.2×厚0.3~0.7	緑泥片岩製・灰色
2	石製模造品	大E-4-15 I-25 K3	B	自然流路56	古代	3		長2.2×幅1.9×厚0.3	滑石製・双孔円盤
3	瓦質土器・椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世	5		口径14.0×高3.5	
4	瓦質土器・椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世	6		口径12.3×高3.3	
5	瓦質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世	7		口径7.7×高1.4	
6	石壺	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世	8		口径21.0×高7.9	
7	瓦質土器・羽釜	大E-4-15 I-25 L2-M2	B	井戸60	中世	10		口径32.0×高24.8	
8	瓦質土器・小皿	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	土坑76	中世	12		口径9.0×高1.9	
9	瓦質土器・椀	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	土坑76	中世	13		口径14.6×高4.7	
10	瓦質土器・椀	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	土坑76	中世	14		口径14.2×高5.7	
11	瓦質土器・椀	大E-4-15 I-25 M2-M3	B	井戸39	中世	18		口径14.8×高3.2	
12	道具瓦	大E-4-15 I-25 J2	B	焼失建物跡11	中世	26		胴部径22.9×高8.3	雁振
13	鬼瓦	大E-4-15 I-25 J1-J2	B	焼失建物跡11	中世	27		基部5.2×高8.2	角
14	建築材	大E-4-15 I-25 K2	B	焼失建物跡11	中世	28			土堀片
15	建築材	大E-4-15 I-25 K2	B	焼失建物跡11	中世	28			土堀片
16	建築材	大E-4-15 I-25 J1-J2 大E-4-15 I-25 K1-K2	B	焼失建物跡11	中世	28			土堀片
17	建築材	大E-4-15 I-25 J1-J2 大E-4-15 I-25 K1-K2	B	焼失建物跡11	中世	28			土堀片
18	建築材	大E-4-15 I-25 K2	B	焼失建物跡11	中世	29			土堀片
19	土師質土器・蛸壺	大E-4-15 I-25	A		中世	30		高7.5×厚0.7	砲弾形
20	土師質土器・蛸壺	大E-4-15 I-25 LA	B	溝13	中世	31		高7.2×厚1.1	砲弾形
21	硯	大E-4-15 I-24 I19	C	瓦廢棄土坑7	中世	35		縦17.2×横8.8×厚2.3	
22	平瓦	大E-4-15 I-24 I20	B	井戸1	近世	40		縦22.8×横22.6×厚3.3	
23	平瓦	大E-4-15 I-24 I20	B	井戸1	近世	41		縦22.2×横22.7×厚3.2	
24	平瓦	大E-4-15 I-24 I20	B	井戸1	近世	42		縦22.2×横22.6×厚3.2	
25	敲石	大E-4-15 I-24	E		古代		1	長11.3×幅10.5×厚8.0	
26	弥生土器・長頸壺	大E-4-15 I-25 L1	B		古代		1	高9.0×厚0.7	
27	弥生土器・壺	大E-4-15 I-25 K2-K3 大E-4-15 I-25 L3-L4	B		古代		1	高2.8	底部
28	弥生土器・高坏	大E-4-15 I-25 L2	B	土坑57	古代		1	高5.4	
29	弥生土器・甕	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42	古代		1	底径7.7×高5.1	底部
30	須惠器・杯蓋	大E-4-15 I-25 L3-L4 大E-4-15 I-25 M3-M4	B		古代		1	口径14.0×高4.1	
31	須惠器・杯蓋	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42	古代		1	高3.5	
32	須惠器・杯身	大E-4-15 I-25	A		古代		1	口径11.0×高2.7	
33	須惠器・甕	大E-4-15 I-25 N5	A	土坑75	古代		1	高4.5	
34	須惠器・杯蓋	大E-4-15 I-24 D11-D12 大E-4-15 I-24 E11-E12	D	自然流路27	古代		1	高3.4	
35	須惠器・高杯	大E-4-15 I-25	A		古代		1	脚径7.0	
36	埴輪	大E-4-15 I-25	A		古代		1	残長11.5	家形?
37	須惠器・小形口壺	大E-4-15 I-25	A		古代		1	口径11.0×高5.4	
38	須惠器・蛸壺	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13	古代		1	残長4.3 穿孔径0.8	
39	須惠器・蛸壺	大E-4-15 I-25 L4-L5 大E-4-15 I-25 M4-M5	A	溝13	古代		1	残長4.3 穿孔径1.0	
40	須惠器・蛸壺	大E-4-15 I-25 P7	A	土坑26	古代		1	残長4.9 穿孔径1.15	
41	須惠器・蛸壺	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42	古代		1	残長5.9 穿孔径0.9	
42	須惠器・蛸壺	大E-4-15 I-25 L4-L5 大E-4-15 I-25 M4-M5	A	溝13	古代		1	残長6.4 穿孔径0.9	
43	須惠器・蛸壺	大E-4-15 I-25 L4-L5 大E-4-15 I-25 M4-M5	A	溝13	古代		1	残長5.4 穿孔径1.0	
44	製塩土器	大E-4-15 I-25 J1-J2	B	焼失建物跡11	古代		1	残高3.1 底径4.4	
45	製塩土器	大E-4-15 I-24	E		古代		1	残高2.9 底径4.2	
46	製塩土器	大E-4-15 I-25 L1	B		古代		1	残高2.5 底径3.4	
47	製塩土器	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	土坑76	古代		1	残高3.4 底径4.0	
48	円盤	大E-4-15 I-25	A		中世		1	長径4.7 短径3.8 厚0.6~1.0	瓦質
49	円盤	大E-4-15 I-25 N7	A	溝13	中世		1	長径5.4 短径5.0 厚0.5~0.8	瓦質
50	円盤	大E-4-15 I-25 M4-N4	A		中世		1	長径6.4 短径5.8 厚1.8~1.9	
51	円盤	大E-4-15 I-25 N5-N6 大E-4-15 I-25 O6	A		中世		1	長径4.1 短径3.0 厚0.8~0.9	瓦質
52	円盤	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42	中世		1	長径5.3 短径4.5 厚1.0~1.2	須惠質
53	円盤	大E-4-15 I-25 K2	B	土坑33	中世		1	長径6.1 短径5.2 厚1.8	瓦質
54	円盤	大E-4-15 I-25 L4-L5 大E-4-15 I-25 M4-M5	A	溝13	中世		1	長径4.9 短径4.4 厚0.9~1.3	瓦質

表3 遺物一覽表(1)

遺物 No.	器種	出土地点	地区	遺構	時代	写真 No.	写真 図版	法量 (cm)	備考
55	千体仏	大E-4-15 I-25 O6	A	溝13	中世		2	長9.8	
56	瓦質土器・椀	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42	中世		3	口径14.0×高4.3	
57	土師質土器・皿	大E-4-15 I-25	B		中世		3	口径14.0×高1.7	朱描
58	瓦質土器・羽釜	大E-4-15 I-25 M3	B	井戸63	中世		3	口径26.4~29.3×高22.2	
59	青磁碗	大E-4-15 I-25 K1	B		中世		3	口径13.8×高7.6	
60	瓦質土錘	大E-4-15 I-25	A		中世		3	長7.4 最大径4.3 最小径2.0 穿孔径1.5	環状
61	瓦質土錘	大E-4-15 I-25	B	溝13	中世		3	長6.5 穿孔径1.3	環状
62	瓦質土錘	大E-4-15 I-25 K2-L2 大E-4-15 I-25 L3-M3	B		中世		3	長7.0 最大径6.3 最小径3.7 穿孔径2.6	環状
63	瓦質土錘	大E-4-15 I-24	C		中世		3	長5.1 最大径5.6 最小径4.0 穿孔径2.9	環状
64	瓦質土錘	大E-4-15 I-25 K2-L2 大E-4-15 I-25 L3-M3	B		中世		3	長6.2 最大径5.5 最小径2.0 穿孔径2.1	環状
65	土錘	大E-4-15 I-25 K2	B		中世~近世		3	長4.5 最大径1.1 最小径0.6 穿孔径0.4	環状
66	土錘	大E-4-15 I-24 G6	C	井戸3	中世~近世		3	長3.8 最大径1.1 最小径0.6 穿孔径0.3	環状
67	土錘	大E-4-15 I	B		中世~近世		3	長4.0 最大径1.05 最小径0.6 穿孔径0.3	環状
68	土錘	大E-4-15 I-25 N6-O6	A		中世~近世		3	長4.3 最大径1.1 最小径0.6 穿孔径0.3	環状
69	土錘	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42	中世~近世		3	長4.0 最大径0.9 最小径0.5 穿孔径0.3	環状
70	土錘	大E-4-15 I-24	C		中世~近世		3	長4.0 最大径1.0 最小径0.6 穿孔径0.4	環状
71	土錘		B		中世~近世		3	長4.4 最大径0.9 最小径0.5 穿孔径0.3	環状
72	土錘	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		中世~近世		3	長3.6 最大径0.85 最小径0.5 穿孔径0.3	環状
73	石塼	大E-4-15 I-25 K2-L2 大E-4-15 I-25 L3-M3	B		中世		3	口径24.0×高9.7	
74	砥石	大E-4-15 I-25	B	焼失建物跡11	中世		3	長8.4×幅6.0×厚3.8	
75	鬼瓦	大E-4-15 I-25 M5	A	土塀20			4	長19.0×幅15.0×厚4.0	
76	鬼瓦	大E-4-15 I-25 O7	A				4	長21.0×幅11.5×厚2.8	
77	鬼瓦	大E-4-15 I-25 L4-L5	B	溝13			4	長5.6×幅8.2×厚2.2	
78	鬼瓦	大E-4-15 I-25 J1-J2	B	焼失建物跡11			4	長7.0×幅8.5×厚1.1	
79	鬼瓦	大E-4-15 I-25 O7	A				4	長7.0×幅7.3×厚2.8	
80	鬼瓦	大E-4-15 I-25 N5	A	溝42			4	長9.0×幅5.0×厚1.5	
81	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4-L5 大E-4-15 I-25 M4-M5 大E-4-15 I-25 M4-N5	A A A	溝13			5	長7.1×幅4.3×厚2.4	蓮華・唐草文
82	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M4	B				5	径15.8	蓮華文
83	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B				5	径15.6	蓮華文
84	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J1-J2	B	焼失建物跡11			5	径15.0	蓮華文
85	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K4 大E-4-15 I-25 L3-L4	B	溝13			5	径13.6	蓮華文
86	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13			5	径15.5	蓮華文
87	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M4	A	溝13			5	径14.5	蓮華文
88	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-24	C				5		蓮華文
89	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42	3段階		5	径13.8	蓮華文
90	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K2-K3 大E-4-15 I-25 L3-L4	B				5	径15.0	蓮華文
91	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M4	A	溝13	1段階		5	径15.4	蓮華文
92	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 N4-N5	A				5	径12.0	蓮華文
93	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13	4段階		5	径15.2	文字瓦
94	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4-L5 大E-4-15 I-25 M4-M5	A	溝13			5	径15.0	火焰宝珠文
95	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-24 G16	C	井戸3			5	径14.8	巴文
96	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M5	A	土塀20	2段階		6	径15.1	巴文
97	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J2-K2 -L3-L4	B	砂堆46			6	径16.0	巴文
98	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4-L5 大E-4-15 I-25 M4-M5	A	溝13			6	径13.8	巴文
99	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M4	A	溝13	3段階		6	径14.1	巴文
100	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13			6		巴文
101	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M4-M5	A				6		巴文
102	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J2	B				6		巴文
103	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J2	B				6		巴文
104	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13			6		巴文
105	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-24 K20	B				6		巴文
106	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-24 J19	C				6		巴文
107	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-24 I19	C	土坑7			6		巴文
108	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-24 I19	C	土坑7			6		巴文

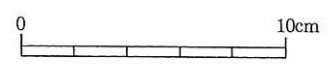
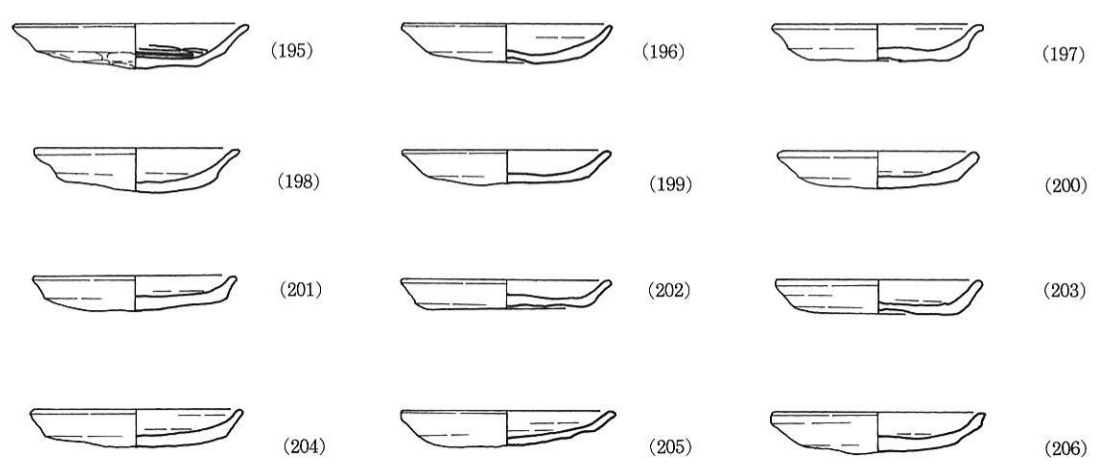
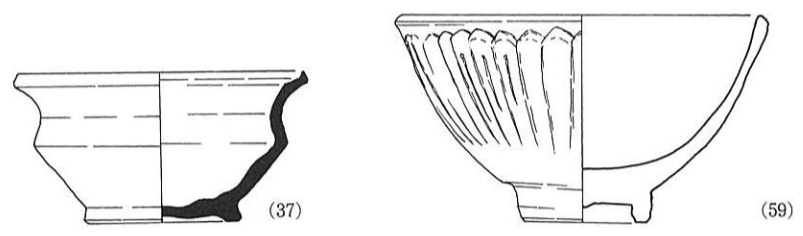
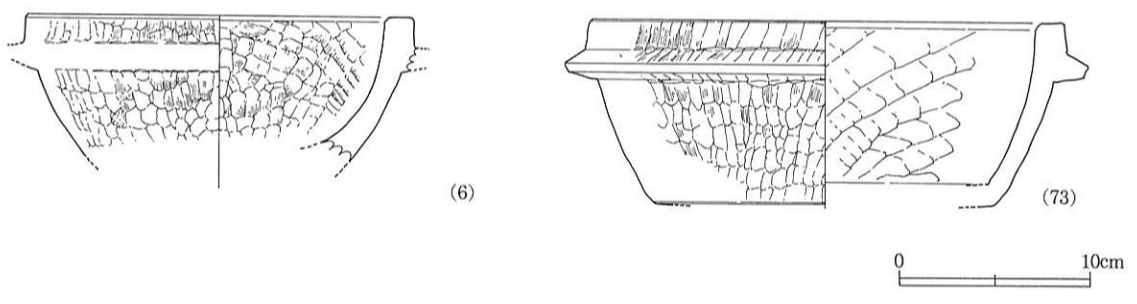
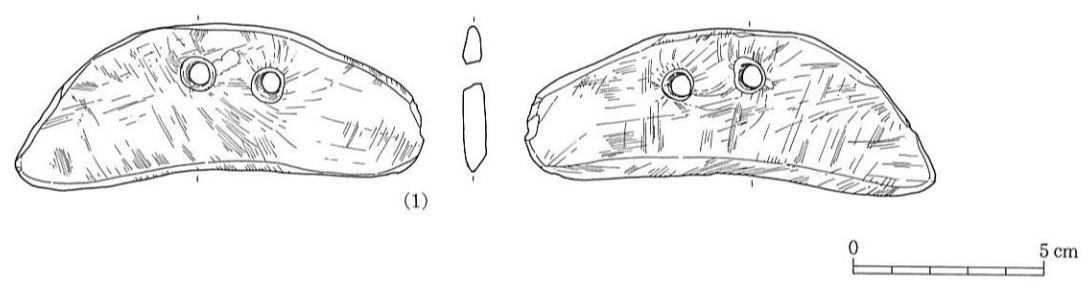
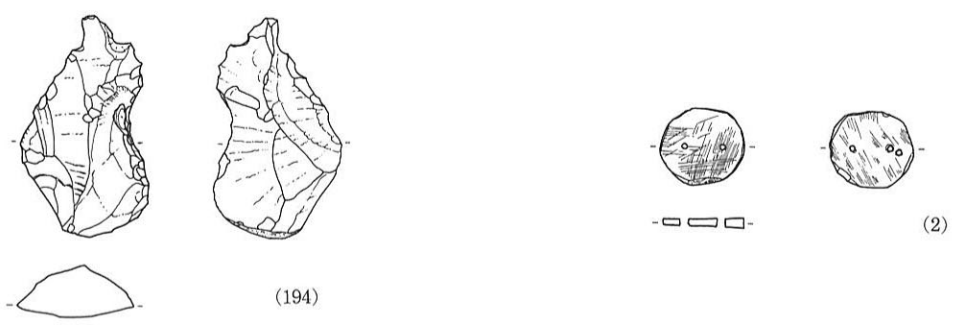
表3 遺物一覽表(2)

遺物 No.	器種	出土地点	地区	遺構	時代	写真 No.	写真 図版	法量 (cm)	備考
109	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 N6	A				6		巴文
110	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42			6		巴文
111	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 O8-P8	A				6		巴文
112	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J1	B				7		巴文
113	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J2	B				7		巴文
114	道具瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M4	A	溝13			7		巴文
115	道具瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K3-L3 -L4-L5	B	自然流路56			7		巴文
116	道具瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13			7		巴文
117	道具瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13			7		巴文
118	道具瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 P8	A				7		巴文
119	道具瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25	A				7		巴文
120	軒丸瓦	大E-4-15 I-25 O7	A	溝13			7		玉縁式
121	軒丸瓦	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42			7		玉縁式
122	軒丸瓦	大E-4-15 I-25 M6	A				7		玉縁式
123	軒丸瓦	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13			7		玉縁式
124	軒丸瓦	大E-4-15 I-25 M5	A	土塀20			7		玉縁式
125	軒丸瓦	大E-4-15 I-25 O7	A				7		玉縁式
126	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47		8	長23.5		蓮華文
127	軒丸瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K3	B	溝13		8	長40.5		玉縁式
128	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K3-K4 -L4-L5	B			9	幅11.0		唐草文
129	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25	A			9	幅6.0		唐草文
130	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M4	B			9	幅13.0		唐草文
131	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K2	B	焼失建物跡11		9	幅4.0		唐草文
132	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M5	A			9	幅6.0		唐草文
133	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K2	B	土坑33		9	幅10.4		唐草文
134	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J1-J2	B	焼失建物跡11		9	幅8.3		唐草文
135	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K2	B	土坑33		9	幅5.0		唐草文
136	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13		9	幅6.3		唐草文
137	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-24 H14-H15	C	井戸4		9	幅7.5		唐草文
138	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M4	B			9	幅26.2		連珠文
139	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M4, L4	B			9	幅15.0		連珠文
140	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K3	B	土坑36		9	幅8.0		連珠文
141	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B			9	幅15.0		連珠文
142	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L3	B			9	幅9.0		連珠文
143	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J1-J2	B	焼失建物跡11		9	幅9.0		連珠文
144	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J2	B			9	幅6.0		連珠文
145	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B			9	幅12.0		連珠文
146	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L6	B			9	幅10.5		連珠文
147	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K3	B	土坑36		9	幅6.5		連珠文
148	軒平瓦(瓦当) 軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K2-L2 L3-M3	B			9	幅12.0		連珠文
149	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13		9	幅13.5		連珠文
150	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 J1-J2	B	焼失建物跡11		9	幅12.1		連珠文
151	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M6	A			9	幅14.0		連珠文
152	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 K2-K3 L3-L4	B			9	幅11.5		連珠文
153	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25	B			9	幅14.0		連珠文
154	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-24 J18	C			9	幅24.5		連珠文
155	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 N6-N7 O6-O7	A	溝79		10	幅26.6		唐草文
156	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4-L5 M4-M5	A	溝13		10	幅6.8		唐草文
157	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 N6-N7 O6-O7	A	溝79		10	幅9.6		唐草文
158	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 O7	A	溝13		10	幅6.5		唐草文
159	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 N6-N7	A			10	幅7.3		唐草文
160	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M5	A	土塀20		10	幅16.4		唐草文
161	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42		10	幅14.0		唐草文
162	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25	A			10	幅7.0		連珠文
163	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25	A			10	幅9.0		連珠文
164	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 N5-N6	A	溝42		10	幅9.7		連珠文
165	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M4-M5	A			10	幅9.5		連珠文

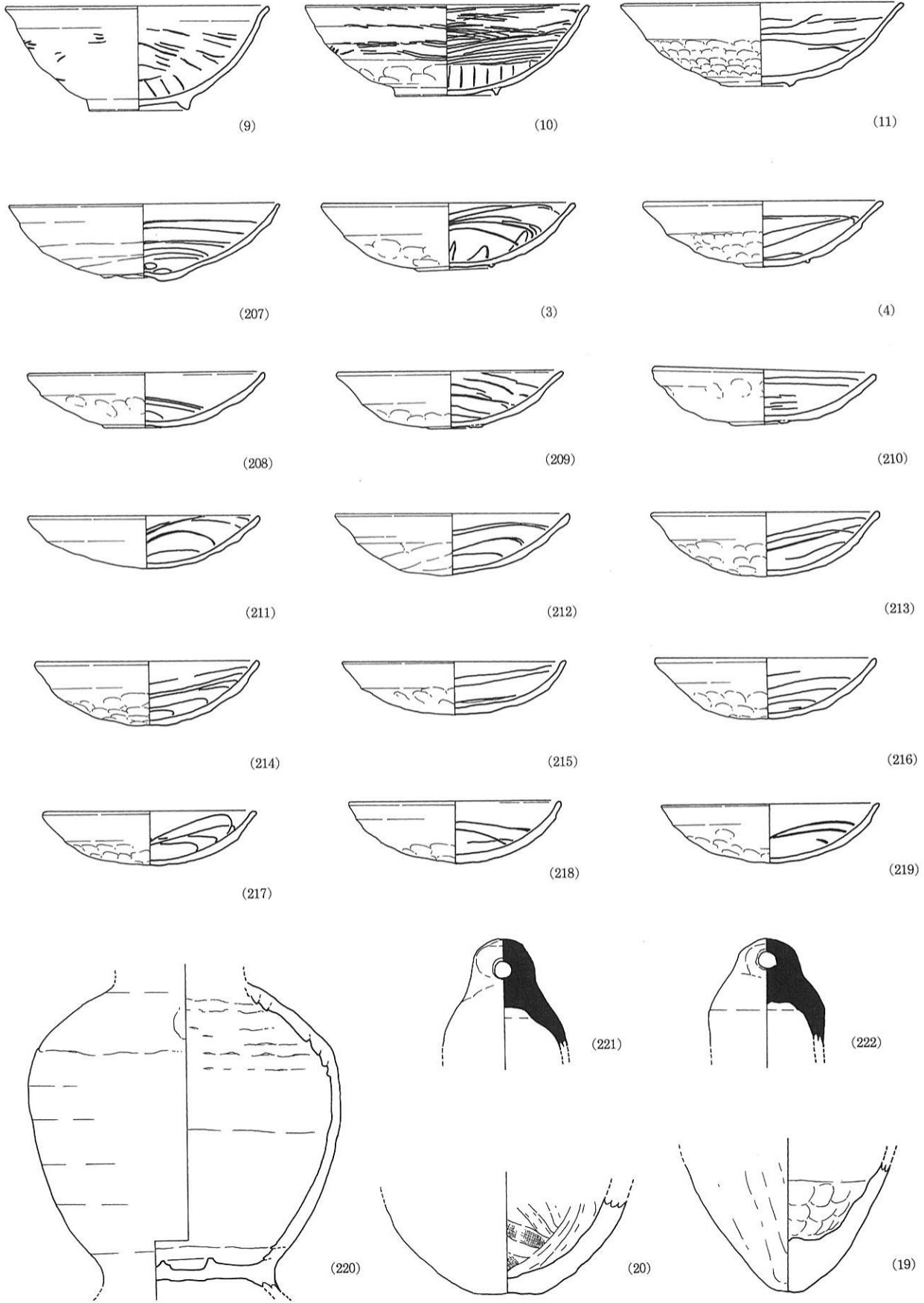
表3 遺物一覽表(3)

遺物 No.	器種	出土地点	地区	遺構	時代	写真 No.	写真 図版	法量 (cm)	備考
166	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 N6-O6	A				10	幅9.4	連珠文
167	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4-L5 M4-M5	A	溝13			10	幅8.5	連珠文
168	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 M5	A				10	幅11.0	連珠文
169	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 L4	A	溝13			10	幅7.0	連珠文
170	軒平瓦(瓦当)	大E-4-15 I-25 Q9	A				10	幅7.0	連珠文
171	磁器・碗	大E-4-15 I-25 O7	A		近世		11	口径11.0×高5.1	染付
172	磁器・仏飯具	大E-4-15 I-25	A		近世		11	高4.9	染付
173	磁器・碗	大E-4-15 I-25 O6	A		近世		11	高4.8	染付
174	磁器・碗	大E-4-15 I-25	A		近世		11	口径9.0×高5.3	染付
175	磁器・碗	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11	口径13.0×高3.5	銅判染付
176	磁器・碗	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11	口径11.0×高4.9	銅判染付
177	磁器・碗	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11	口径11.0×高5.6	銅判染付
178	陶器・蛸壺	大E-4-15 I-25 O7	A		近世		11	高8.6	
179	陶器・搦鉢	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11	口径28.0×高10.0	
180	陶器・搦鉢	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11	高8.0	
181	土製品・玩具	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11	径3.3×厚0.7	天狗
182	自然遺物1・石材	大E-4-15 I-25 L4	B	溝13	中世~近世		11	21.5×9.5×4.5	
183	自然遺物1・石材	大E-4-15 I-24 G16	C	井戸3	中世~近世		11	16.0×7.5×4.5	
184	自然遺物1・石材	大E-4-15 I-24 H18-I18	C	井戸5	中世~近世		11	15.0×11.0×9.5	
185	自然遺物2・貝	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11		
186	自然遺物2・貝	大E-4-15 I-24 I18	C		近世		11		
187	自然遺物2・貝	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11		
188	自然遺物2・貝	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11		
189	自然遺物2・貝	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11		
190	自然遺物2・貝	大E-4-15 I-24	E		近世		11		
191	自然遺物2・貝	大E-4-15 I-24 I16	C		近世		11		
192	自然遺物2・貝	大E-4-15 I-25 O8-P8	A		近世		11		
193	自然遺物2・貝	大E-4-15 I-24 G16	C	井戸3	近世		11		
194	剥片	大E-4-15 I-25 N5-N6	B	自然流路80	古代			長5.7×幅3.0×厚1.3	サヌカイト
195	瓦質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	A	自然流路76	中世			口径8.8×高1.7	
196	瓦質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径8.0×高11.5	
197	瓦質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径8.0×高1.4	
198	瓦質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径7.7×高11.6	
199	瓦質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径7.9×高1.3	
200	土師質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径8.0×高1.1	
201	土師質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径7.7×高1.3	
202	土師質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径8.0×高1.1	
203	土師質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径8.0×高1.3	
204	土師質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径7.8×高1.5	
205	土師質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径8.2×高1.4	
206	土師質土器・小皿	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径8.0×高1.5	
207	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径14.4×高3.9	
208	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径12.0×高3.0	
209	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径12.0×高3.1	
210	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径12.0×高3.0	
211	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径12.6×高2.9	
212	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径12.4×高3.2	
213	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径12.2×高3.5	
214	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径12.0×高3.4	
215	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径12.0×高2.8	
216	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径11.6×高3.2	
217	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径11.3×高2.9	
218	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径11.3×高3.3	
219	瓦器椀	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			口径11.6×高3.2	
220	瓦質土器・壺	大E-4-15 I-25 J2	B	土坑47	中世			高残16.0	
221	須惠器・蛸壺	大E-4-15 I-25 K3-L3	B	土坑57	中世			高残5.7	
222	須惠器・蛸壺	大E-4-15 I-24 N6-N7	A	溝79	中世			高残5.7	

表3 遺物一覧表(4)

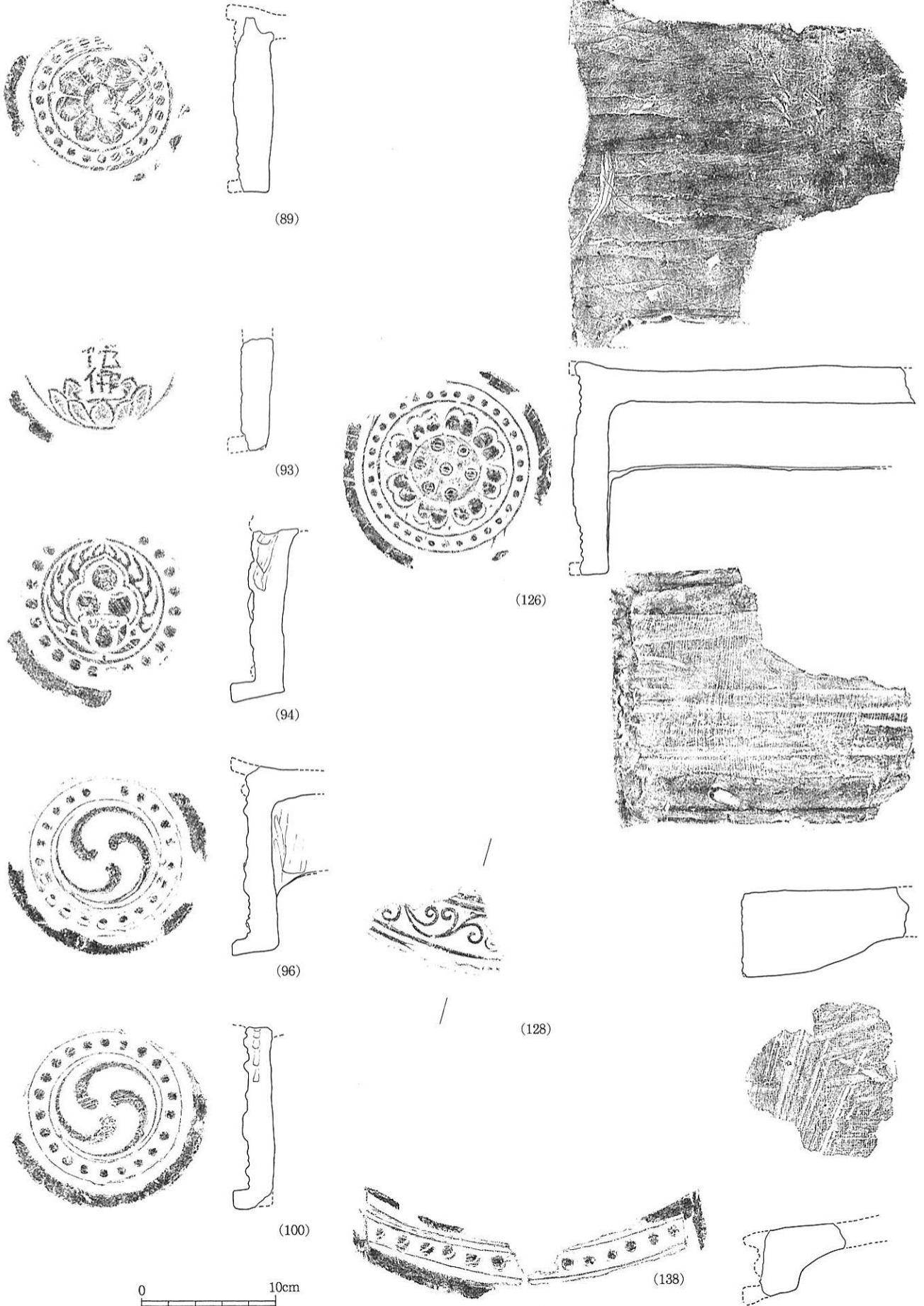


卷末図1 出土遺物（石器、石製品、土器）



卷末图2 出土遺物（土器）

0 10cm

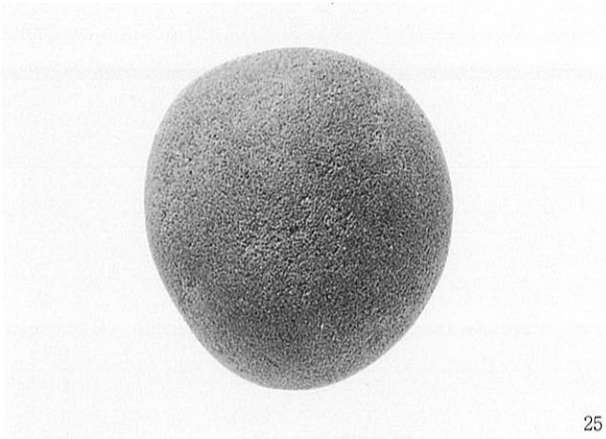


卷末图3 出土遺物 (瓦)

図 版

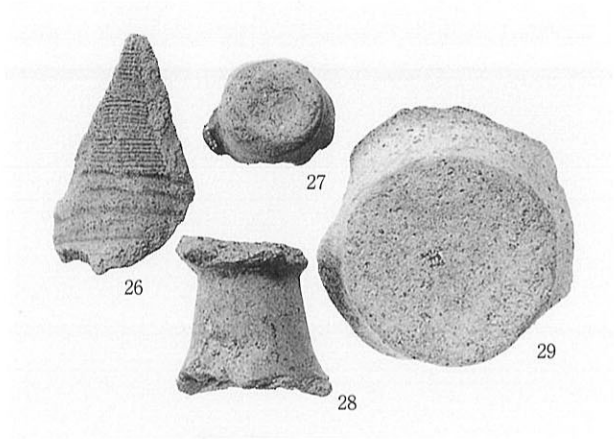


高砂公園に移築された伽羅橋

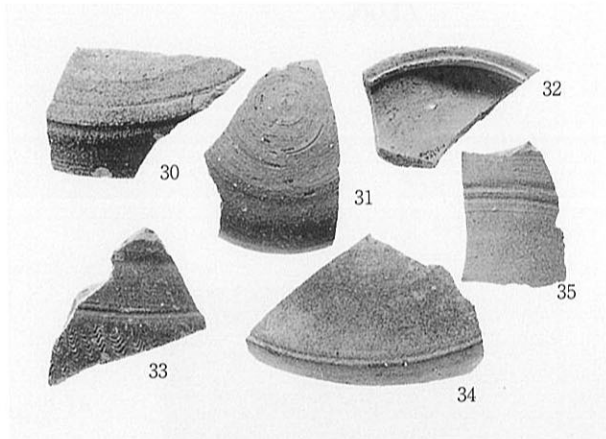


25

敲石：包含層



弥生土器：溝42 (29甕底部) 土坑57 (28高杯脚部) 包含層 (26長頸壺頸部, 27壺底部)



須恵器：自然流路27 (34坏蓋) 溝42 (31坏蓋) 土坑75 (33甕頸部) 包含層 (30坏蓋, 32坏, 35高杯脚部)

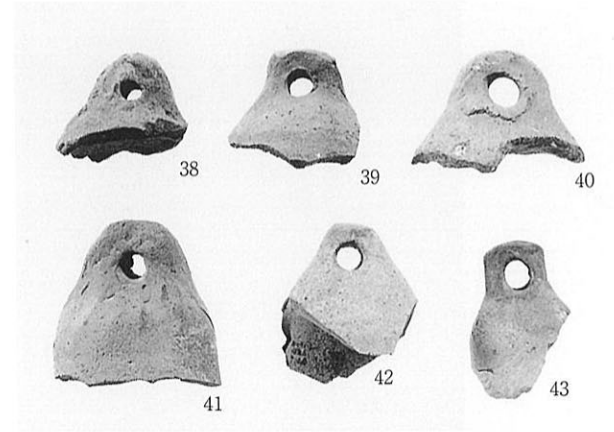


家形埴輪：包含層

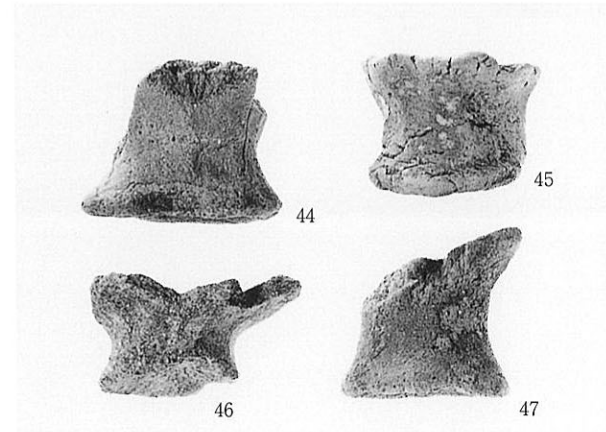


37

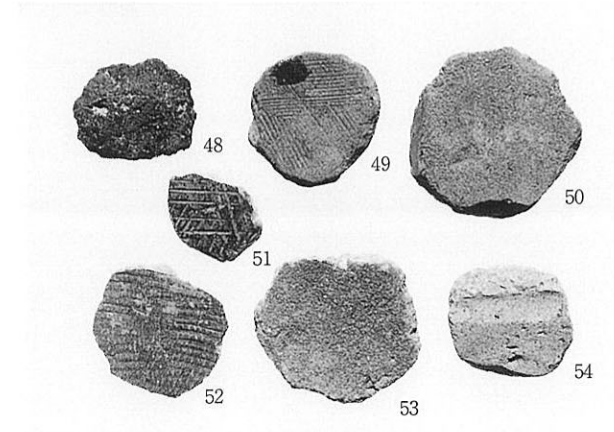
須恵器小型鉢：包含層



須恵器蛸壺：溝13 (38・39・42・43) 土坑26 (40) 溝42 (41)



製塩土器：焼失建物跡11 (44) 土坑76 (47) 包含層 (45・46)



円盤：溝13 (49・54瓦質) 土坑33 (53瓦質) 溝42 (52須恵器) 包含層 (48・51瓦質, 50不明)





瓦器碗：溝42

56



土師質皿：包含層

57



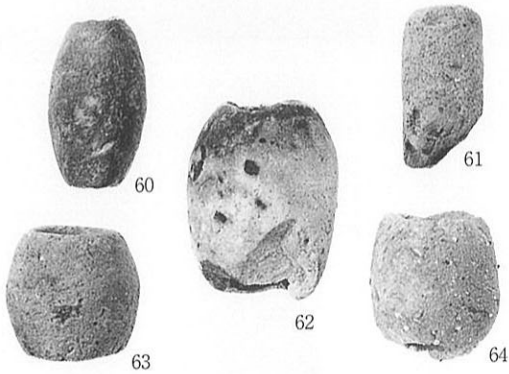
瓦質羽釜：井戸63

58

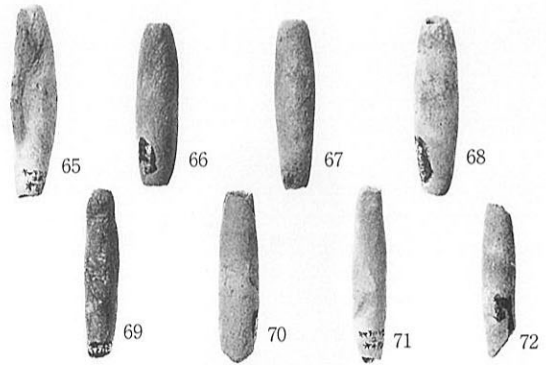


青磁碗：包含層

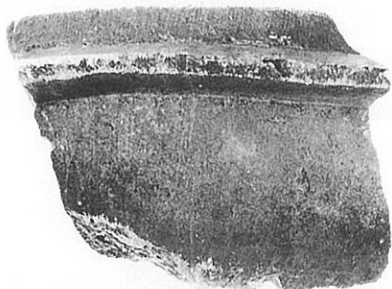
59



環状土錘：溝13 (61) 包含層 (60・62・63・64)



環状土錘：井戸3 (66) 溝42 (69) 包含層 (65・67・68・70・71・72)



石碇：包含層

73



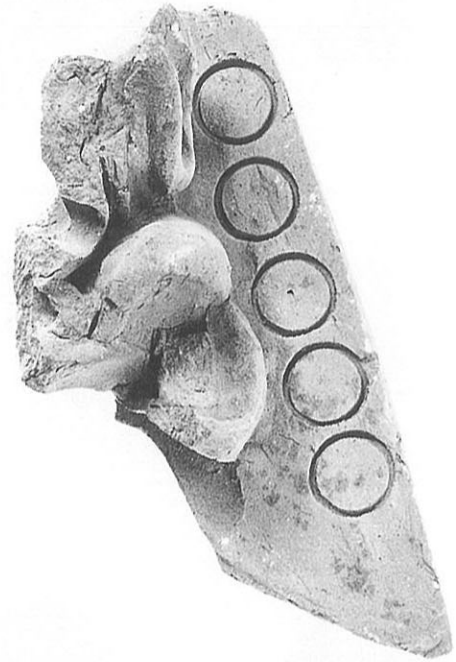
砥石：焼失建物跡11

74



鬼瓦：土塀20

75



鬼瓦：包含層

76



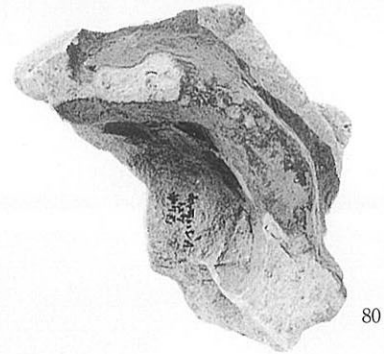
77



78



79



80

鬼瓦：焼失建物跡11 (78) 溝13 (77) 溝42 (80) 包含層 (79)



81



82



83



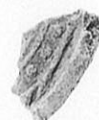
84



85



86



87



88



89



90



91



92



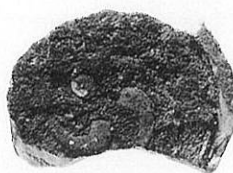
93



94



95



瓦：溝13 (81・85~87・91・93・94) 焼失建物跡11 (84) 溝42 (89) 井戸3 (95) 包含層 (82・83・88・90・92)



瓦：土坑 7 (107·108) 溝13 (98~100·104) 土塀20 (96) 溝42 (110) 砂堆46 (97) 包含層 (101~103·105·106·109·111)



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123

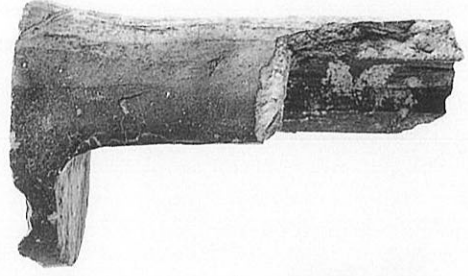
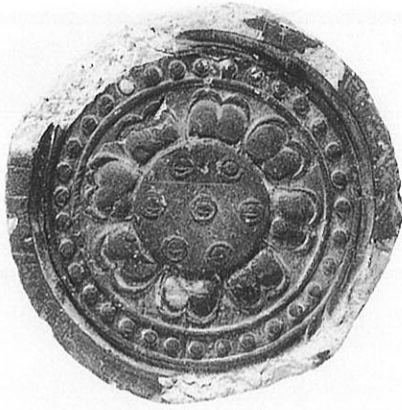


124

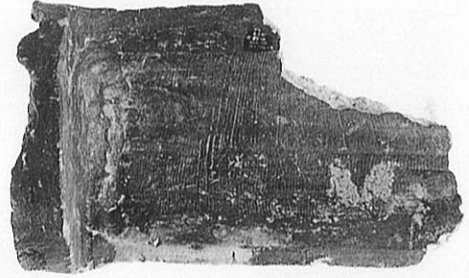


125

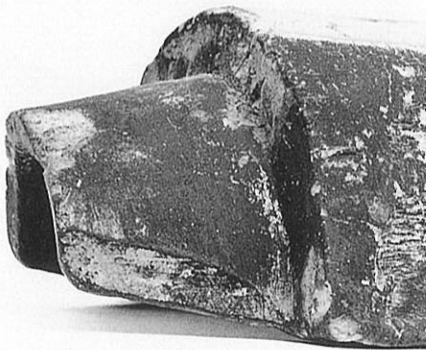
瓦：溝13 (114・116・117・120・123) 土塀20 (124) 溝42 (121) 自然流路56 (115) 包含層 (112・113・118・119・122・125)



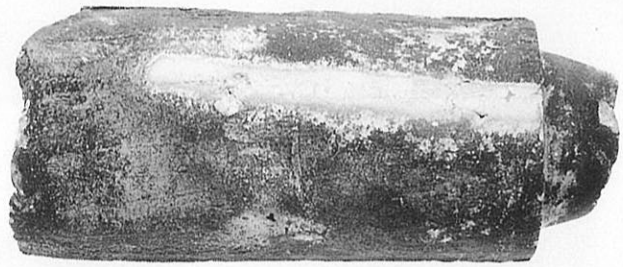
126



蓮華文軒丸瓦：土坑47

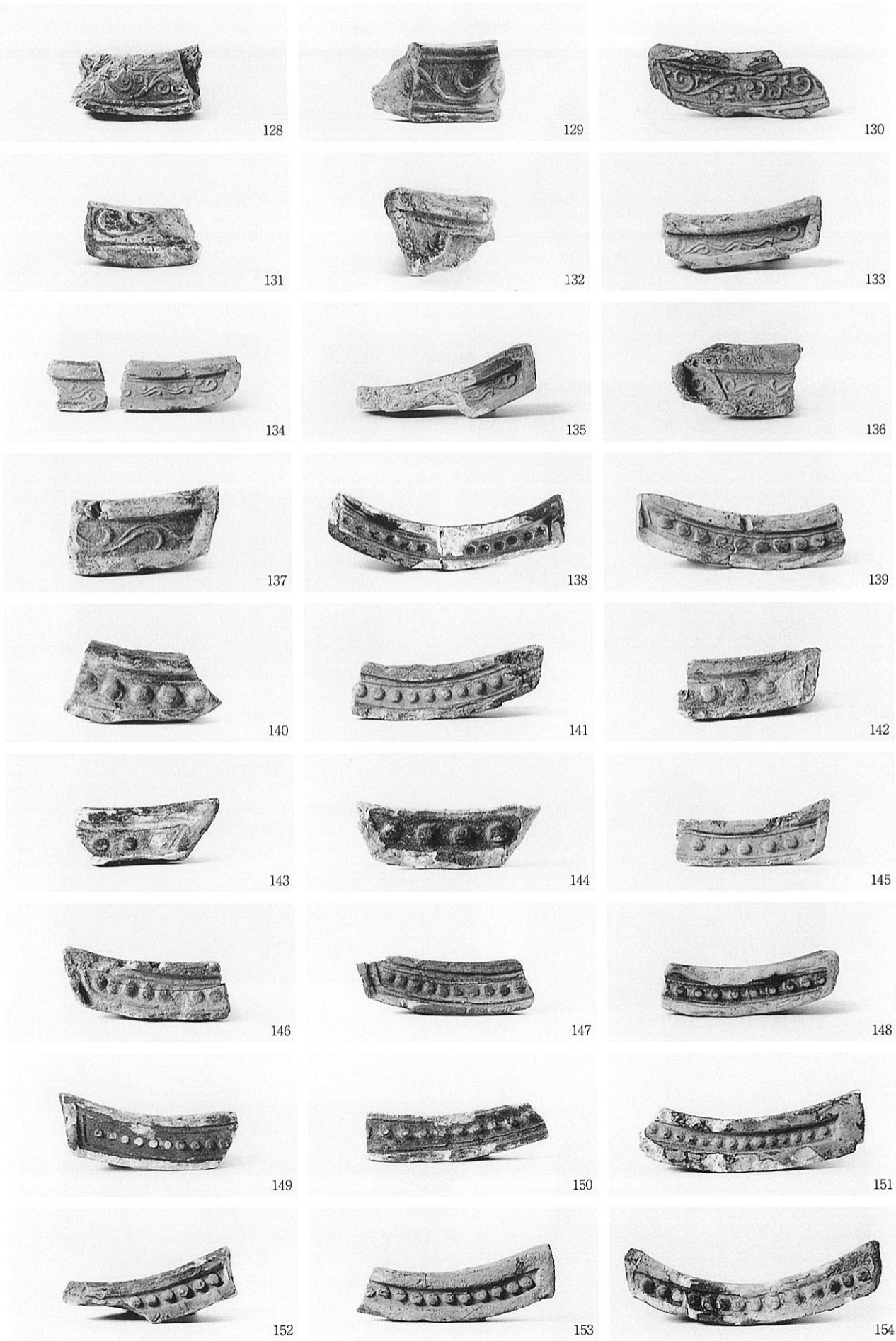


127

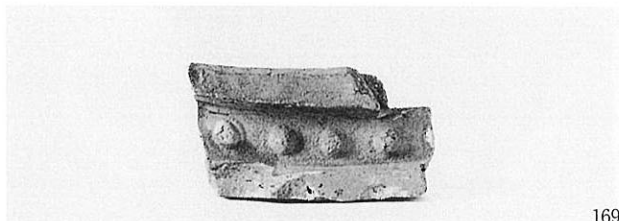
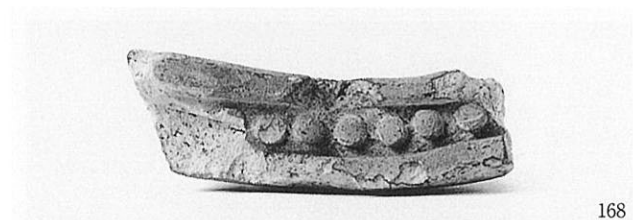
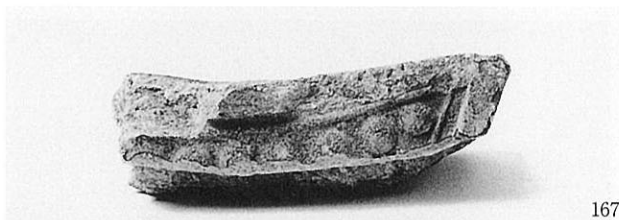
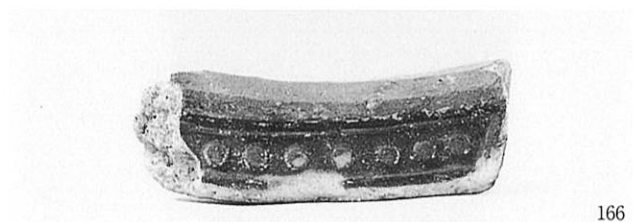
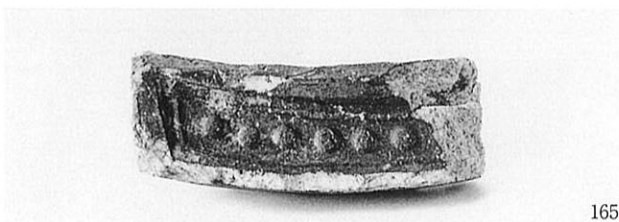
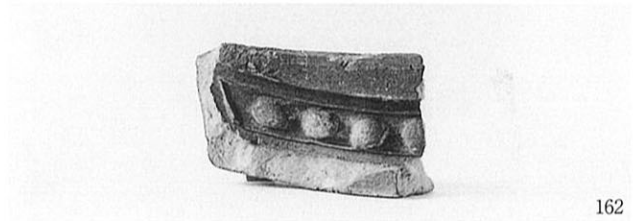


玉縁式丸瓦：溝13

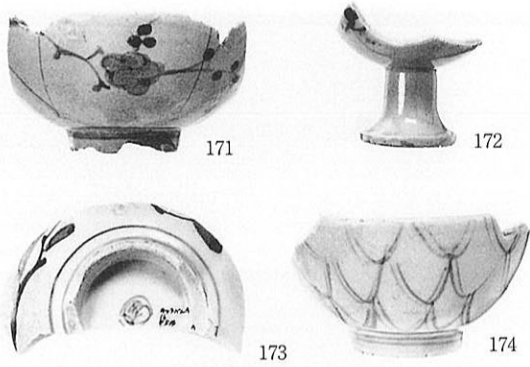




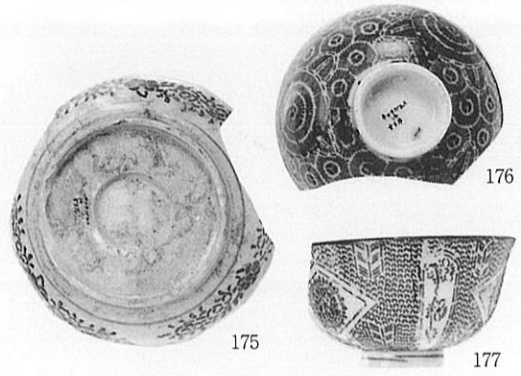
瓦：井戸4 (137) 焼失建物跡11 (131・134・143・150) 溝13 (136・149) 土坑33 (133・135) 土坑36 (140・147) 包含層 (128～130・132・138・139・141・142・144～146・148・151～154)



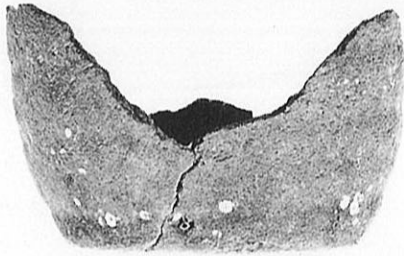
瓦：溝13 (156・158・167・169) 土塀20 (160) 溝42 (161・164) 溝79 (155・157) 包含層 (159・162・163・165・166・168・170)



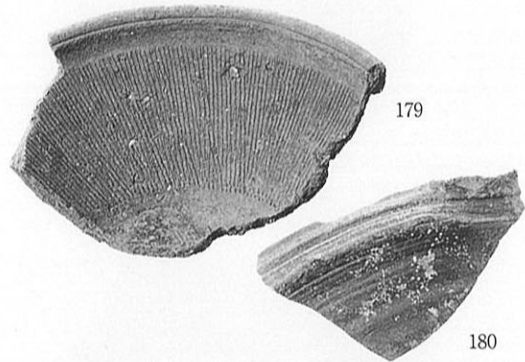
磁器染付：包含層 (171・173・174碗, 172仏飯具)



磁器銅版染付碗：包含層 (175~177)



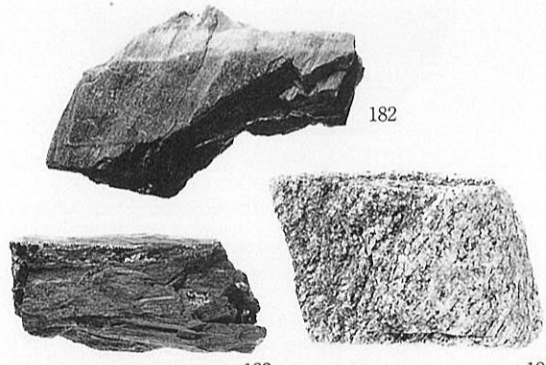
陶器蛸壺：包含層



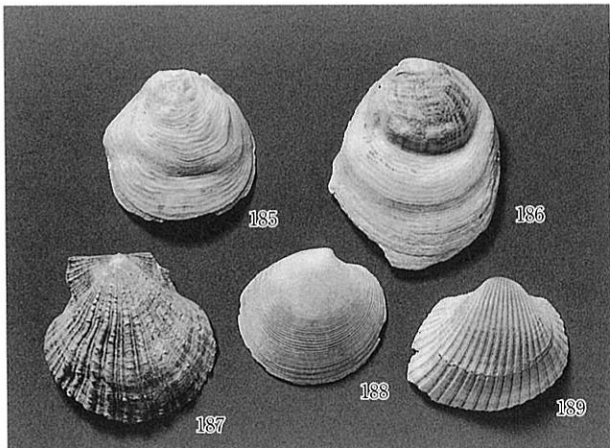
陶器播鉢：包含層



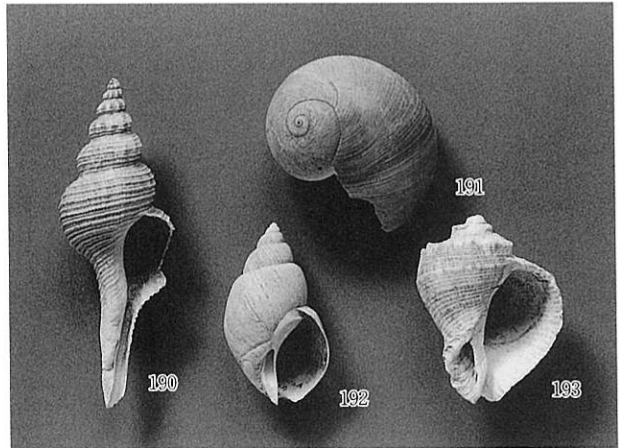
土製玩具：包含層



石材：井戸3 (183) 井戸5 (184) 溝13 (182)



自然遺物 貝：包含層



自然遺物 貝：井戸3 (193) 包含層 (190~192)

報告書抄録

ふりがな	きゃらばしいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	伽羅橋遺跡発掘調査報告書							
副書名	府道高石北線建設事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第63集							
編著者名	服部美都里							
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号							
発行年月日	2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きゃらばし 伽羅橋遺跡	おおさかふたかいしし 大阪府高石市 たかしのほま 高師浜1丁目 所在	27225	3	34° 31′ 30″	135° 26′ 15″	平成11年 10月15日 } 平成12年 3月3日	1100	府道高石北 線建設に伴 う発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
		古代	自然流路	弥生土器・石庖丁 双孔円盤・須恵器		千体仏 火焰宝珠文軒丸瓦		
		中世	寺院跡 土坑 井戸 溝	瓦・瓦質土器・土師 質土器 国産・輸入陶磁器・ 硯・砥石				
		近世	鋤溝 井戸	陶磁器				

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第63集

伽羅橋遺跡発掘調査報告書

大阪府高石市高師浜1丁目所在
府道高石北線建設事業に伴う発掘調査報告書

2001年3月31日

編集・発行 財団法人 大阪府文化財調査研究センター
〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁目21番4号
TEL 0722-99-8791 FAX 0722-99-8905
印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所